食肉販売動向調査結果
（2022年度下半期）

2022年10月
独立行政法人農畜産業振興機構

※　本調査結果は当機構の見解ではなく、当機構が定期的に調査を実施している主要な食肉の卸売業者および小売業者（全ての業者ではない）を対象としたアンケート調査の回答をとりまとめたものである。

【ポイント】（2022年8月現在）

○2022年上半期（実績）は、 これまでの新型コロナウイルス感染症（ 以下「COVID-19」という ）の影響に加え、新たにロシア・ウクライナ情勢や円安・インフレの進展の影響が調査の回答に反映された。

○卸売業者における2022年上半期の販売状況は、牛肉のうち特に輸入品において「相場高」や「円安」などを要因として減少がみられた一方、豚肉については調査先によって増加と減少とで意見が分かれる結果となった。

2022年下半期の販売見通しでは、上半期同様に、輸入牛肉の減少が見込まれる一方、和牛については「消費者の低価格志向」などを要因に全体的には減少傾向も、輸出向けなどでの増加が見込まれている。

○小売業者における2022年上半期の販売状況は、量販店において国産鶏肉以外の全てで減少となる中、輸入品については特に「現地価格の高騰」、「内食需要の減少」、「COVID-19の影響による現地の物流の乱れ」などを要因に減少が顕著となった。

2022年下半期の販売見通しでは、輸入牛肉をはじめとした輸入品の減少が見込まれており、その理由として「仕入価格上昇分の価格転嫁」、「特売回数の減少」、「他畜種への需要シフト」などが挙げられた。

○小売業者における2022年上半期の食肉の取り扱いの他品種などへの切替実績について、量販店では、輸入牛肉の5割で交雑牛や和牛などの国産品への変更がみられたほか、豚肉と鶏肉でも輸入品の6割以上で国産品への変更がみられた。

2022年下半期の切替見通しについては、上半期と同様に、量販店では、輸入牛肉の4割で国産品への変更のほか、輸入豚肉の3割強、輸入鶏肉の6割強で国産品への変更が見込まれている。一方、和牛主体の品揃えである食肉専門店については、実績、見通しともに、おおむね変更なしという結果であった。

調査概要

当機構では、食肉の消費・販売動向を把握するため、年に２回、卸売業者や小売業者（量販店および食肉専門店）の協力を得て、食肉の取り扱いや販売見通しに関するアンケート調査を実施している。

今回は、2022年度上半期（2022年4月～9月） の実績および2022年度下半期（2022年10月～2023年3月）の見通しについて調査を行った（2022年8月時点）。

なお、調査期間中は、COVID-19第7波に当たり感染者数が非常に多い時期であった。

概要は以下のとおりである。

（参考）調査対象者と回収数

1．調査方法

アンケート調査

2．調査対象者と回収率

右表のとおり

3．調査期間

2022年7月25日～8月22日

調査対象者と回収率

(単位：者)

	調査対象者数①	回収数②	回収率（%）③＝②/①
卸売業者			
牛肉	15	15	100
豚肉	13	13	100
小売業者			
量販店	20	20	100
食肉専門店	64	64	100

注：調査対象者は、食肉の市況（仲間相場）や小売価格について、当機構が 定期的に調査を実施している主要な食肉の卸売業者および小売業者であり、全ての業者ではない。

目　次

Ⅰ　卸売業者
牛肉
　1　食肉の取扱状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1頁
　2　仕向け先別販売割合・取扱状況・・・・・・・・・・・・・・・・ 2～3頁
　3　和牛の等級別取扱割合・販売見通し・・・・・・・・・・・・・・ 4～5頁
　4　食肉の部位別販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6頁
　5　輸入食肉の販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7頁
豚肉
　6　食肉の取扱状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8頁
　7　仕向け先別販売割合・取扱状況・・・・・・・・・・・・・・・・ 9頁
　8　食肉の部位別販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10頁
　9　輸入食肉の販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11頁

Ⅱ　小売業者（量販店・食肉専門店）
　1　食肉の取扱割合・販売見通し・・・・・・・・・・・・・・ 12～15頁
　2　和牛の等級別取扱割合・販売見通し・・・・・・・・・・・ 16～17頁
　3　食肉の小売価格・見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18頁
　4　食肉の販売拡大に向けた対応・・・・・・・・・・・・・・ 19～20頁
　5　輸入食肉の取扱割合・販売見通し（量販店）・・・・・・・ 21～23頁
　6　食肉の他品種などへの切替実績・見通し・・・・・・・・・ 24～27頁

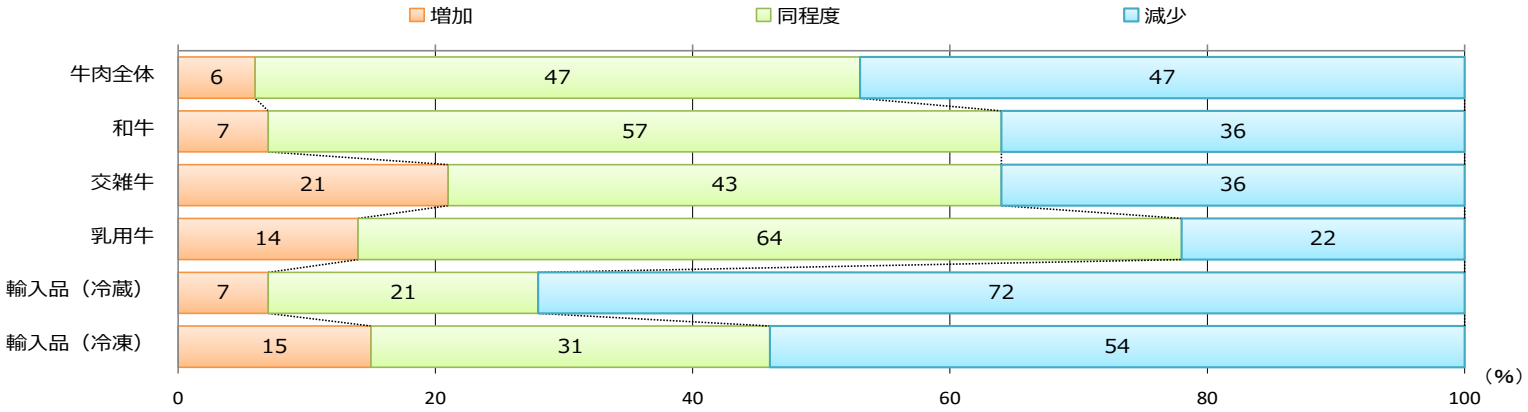
Ⅰ-１　食肉の取扱状況（卸売業者・牛肉）

牛肉全体の取扱状況

～ 輸入品は減少が最多 ～

○2022年度上半期の卸売業者における牛肉全体の取扱状況（重量ベース）について、前回調査（2021年度下半期）との比較で、**牛肉全体では「同程度」と「減少」がいずれも47%と同率になった。**
○品種別に見ると、国産品は「同程度」が最も多く、「減少」が「増加」を上回った。一方、**輸入品は「減少」が最も多かった。**
○減少理由については、国産品は「小売向け需要の減少」、輸入品は「相場高」がそれぞれ最も多く挙げられた。一方、比較的「増加」の多かった交雑牛の増加理由については、「消費者の低価格志向」などが挙げられた。
○前回調査に続くCOVID-19の影響のほか、円安・インフレの影響に伴う取扱状況の変化がうかがえる。

2022年度上半期における牛肉の取扱状況



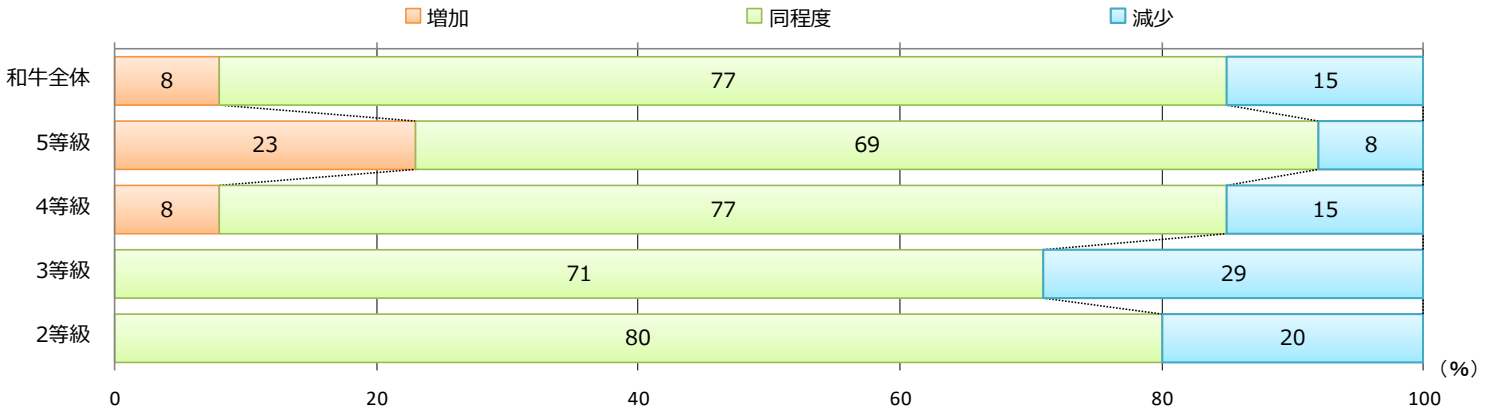
注：重量ベース

和牛の等級別取扱状況

～５等級のみ増加が減少を上回る～

○2022年度上半期の等級別にみた和牛の取扱状況（重量ベース）について、前年同期（2021年度上半期）と比較では、**全ての等級区分で「同程度」が最も多く、5等級を除いて「減少」が「増加」を上回った。**
○減少理由については、全ての等級で「COVID-19の発生状況」や「景気の状況」が挙げられたほか、4等級では「５等級の格付割合の増加」、3等級および２等級では「等級の格付割合の減少」が挙げられた。
○増加理由については、５等級では「5等級の格付割合の増加」が最も多く挙げられた。

等級別にみた和牛の取扱状況（卸売業者）



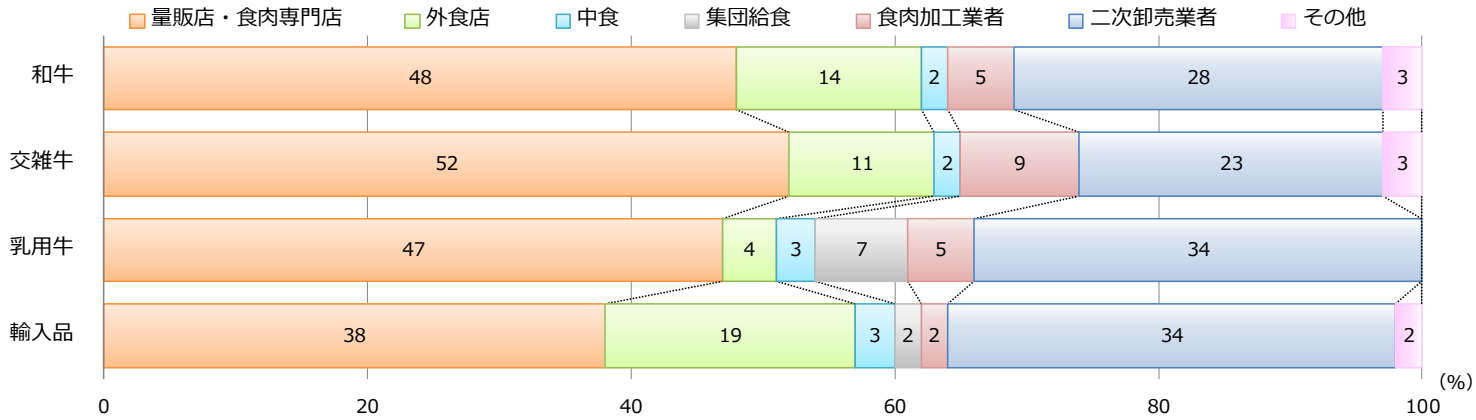
注：重量ベース

Ⅰ-2　仕向け先別販売割合・取扱状況（卸売業者・牛肉）

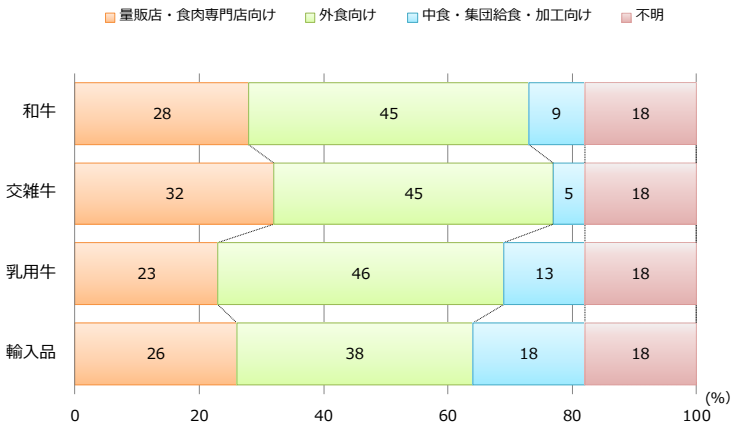
仕向け先別販売割合（冷蔵牛肉）　～「量販店・食肉専門店」向けが最多～

○2022年度上半期の卸売業者における冷蔵牛肉の仕向け先別販売割合の実績（重量ベース）を見ると、**全ての区分で「量販店・食肉専門店」が最も多かった**。
○「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると、**「量販店・食肉専門店」への仕向け割合は、和牛56%、交雑牛59%、乳用牛55%、輸入品47%**となり、前回調査と比較すると、全ての区分で減少した。一方、「外食店」や「二次卸売業者」への仕向け割合が増加した。
○輸入品は「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると、**「外食店」および「中食・集団給食・加工向け」の業務用への仕向け割合が45%**となり、「量販店・食肉専門店」の小売向け（47%）と拮抗している。
○「外食店」の内訳を見ると、全ての区分で「焼き肉店」、「ホテル」の順で多く、いずれも過半を占めた。
○なお、冷蔵と冷凍の構成比は、和牛が冷蔵79%に対し冷凍21%、交雑牛が冷蔵82%に対し冷凍18%、乳用牛が冷蔵71%に対し冷凍29%となった。

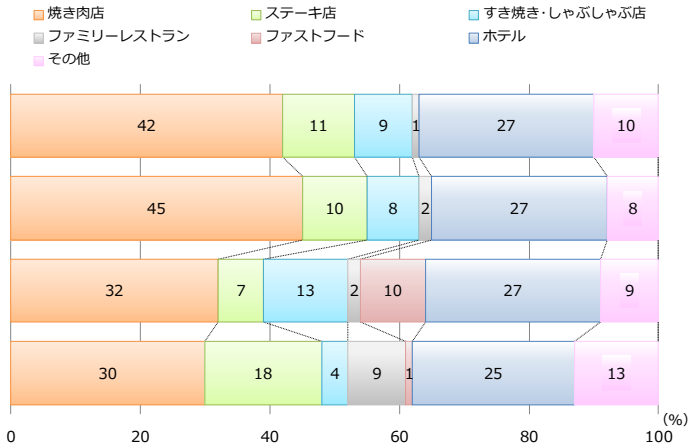
2022年度上半期の仕向け先別販売割合（冷蔵牛肉）



＜参考＞二次卸売業者の最終仕向け先



＜参考＞外食店の内訳



注：データは、各者の仕向先別販売割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

仕向け先別販売割合（冷凍牛肉）

～ 乳用牛を除き「外食」向けが最多 ～

○2022年度上半期の卸売業者における冷凍牛肉の仕向け先別販売割合の実績（重量ベース）を見ると、**乳用牛を除いた全ての区分で「外食店」が最も多かった**。

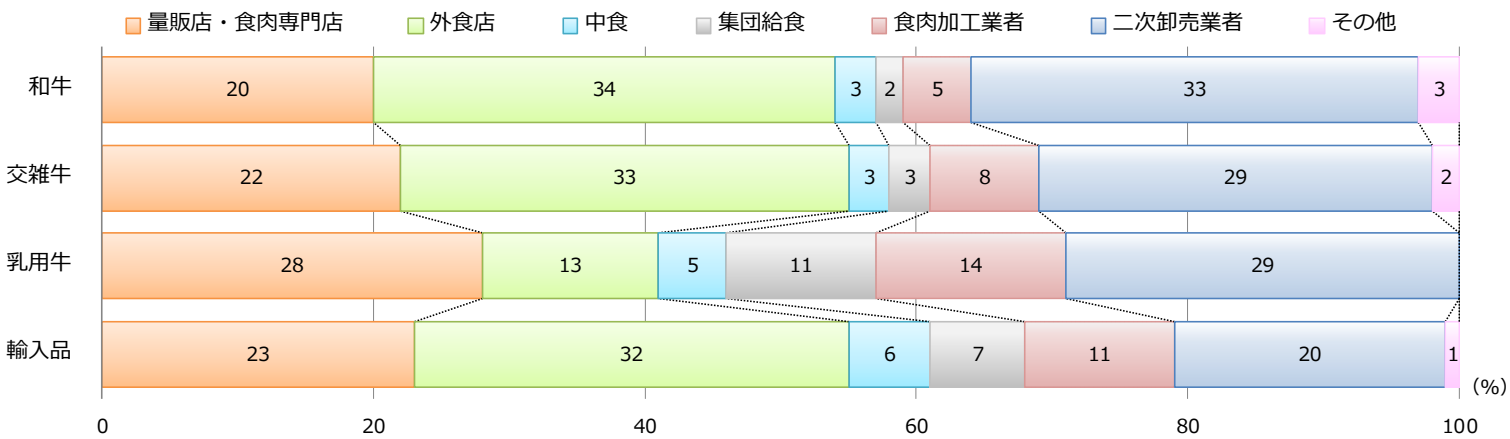
○「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると、**「外食店」への仕向け割合は、和牛49%、交雑牛48%、乳用牛28%、輸入品40%**となった。また、「中食」、「集団給食」および「食肉加工業者」への仕向け割合の合計は、**和牛12%、交雑牛16%、乳用牛35%、輸入品28%**となり、冷凍品は全ての区分において業務向けが中心とみられる。

○「外食店」の内訳は、和牛および交雑牛は「焼き肉店」、「ホテル」、乳用牛は「すきやき・しゃぶしゃぶ店」、「焼き肉店」の順でいずれも過半を占めた一方、輸入品は「ホテル」および「焼き肉店」で36%を占めるものの、国産品と比べて「ファミリーレストラン（16%）」、「ファストフード（11%）」での利用が多い結果となった。

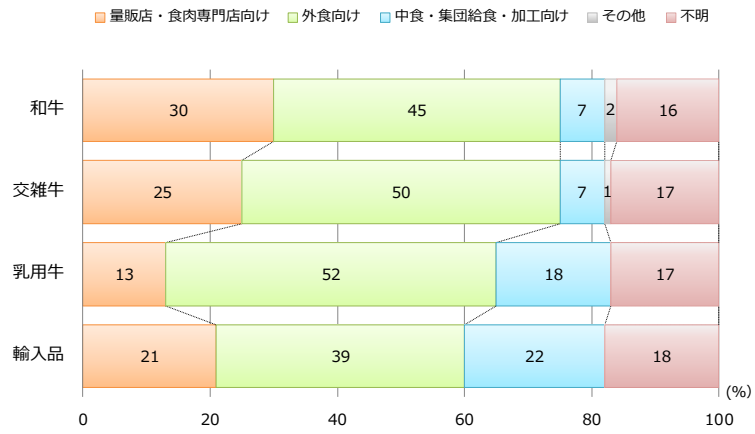
○「量販店・食肉専門店」への仕向け割合は、「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると、和牛30%、交雑牛29%、乳用牛32%、輸入品27%となり、前回調査と比較すると輸入品を除く全ての区分で減少した。

○冷蔵・冷凍の区別をしていない「食肉加工業者」の加工仕向の内訳では、「ハンバーグ」向けが最も多かった。

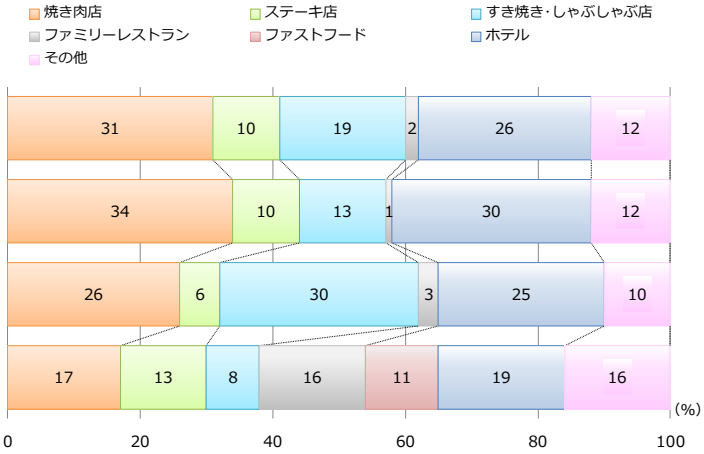
2022年度上半期の仕向け先別販売割合（冷凍牛肉）



＜参考＞二次卸売業者の最終仕向け先



＜参考＞外食店の内訳



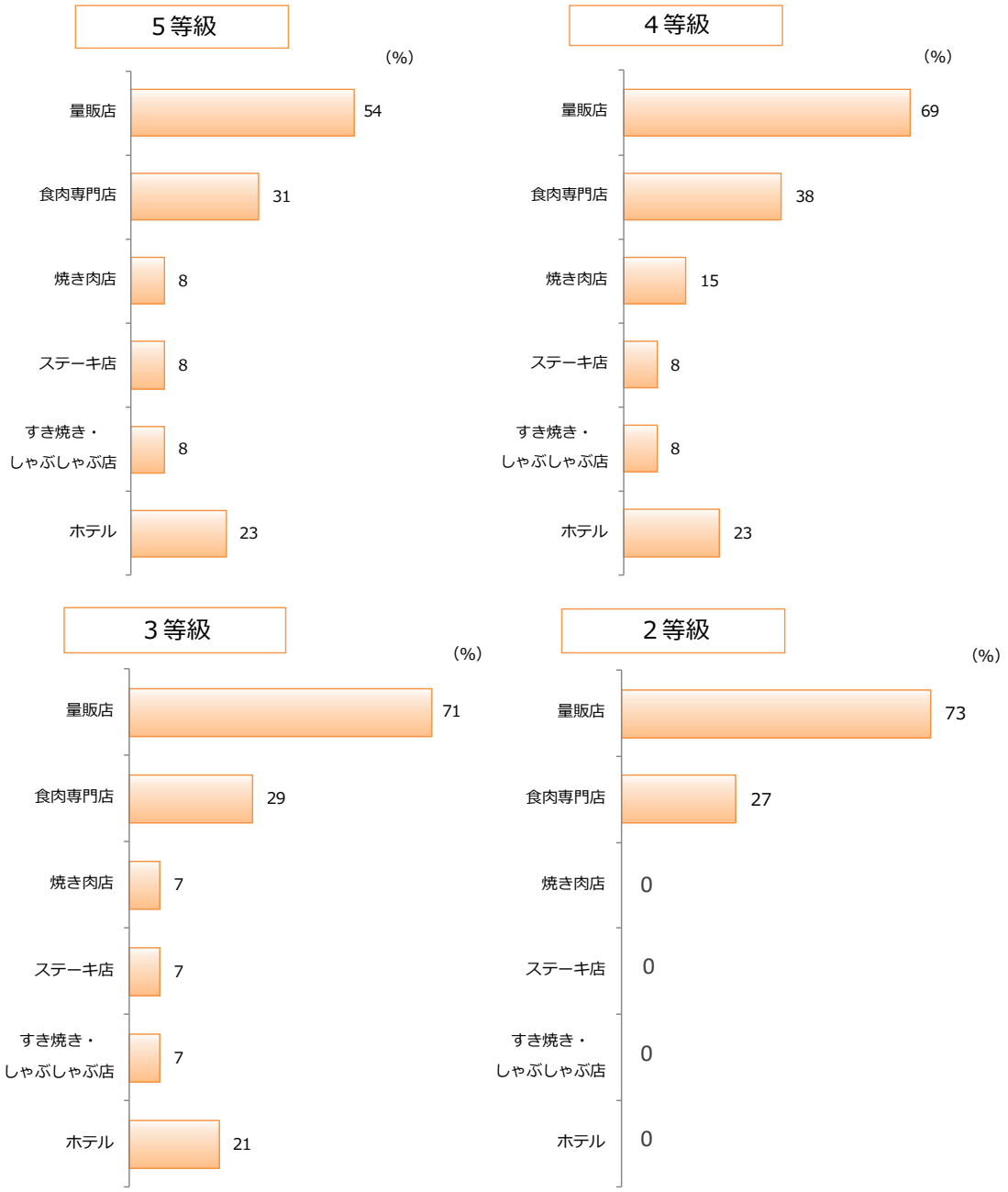
注：データは、各者の仕向先別販売割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

和牛の等級別の主な販売先

～ 全ての等級で「量販店」が最多 ～

○2022年度上半期の卸売業者における和牛の等級別の主な販売先（重量ベース）の割合については、**全ての等級で「量販店」向けが最も多く、次いで「食肉専門店」となった。**
○前年同期（2021年度上半期）と比較すると、「量販店」向けは5等級、4等級および2等級で増加した一方、3等級は同率となった。
○前回調査（2021年度下半期）と比較すると、「量販店」向けは全ての等級で減少したものの、「ホテル」向けは５等級、4等級、３等級で増加した。また、「食肉専門店」向けは5等級で減少した一方、4等級、2等級は増加、3等級は横ばいであった。

和牛の等級別の主な販売先（卸売業者）



注：各等級の取り扱いがある者の販売先割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。（複数回答）

和牛（５等級、４等級）の販売先別販売見通し

～ 輸出、焼き肉店向けが増加の見通しも、その他では減少が増加を上回る ～

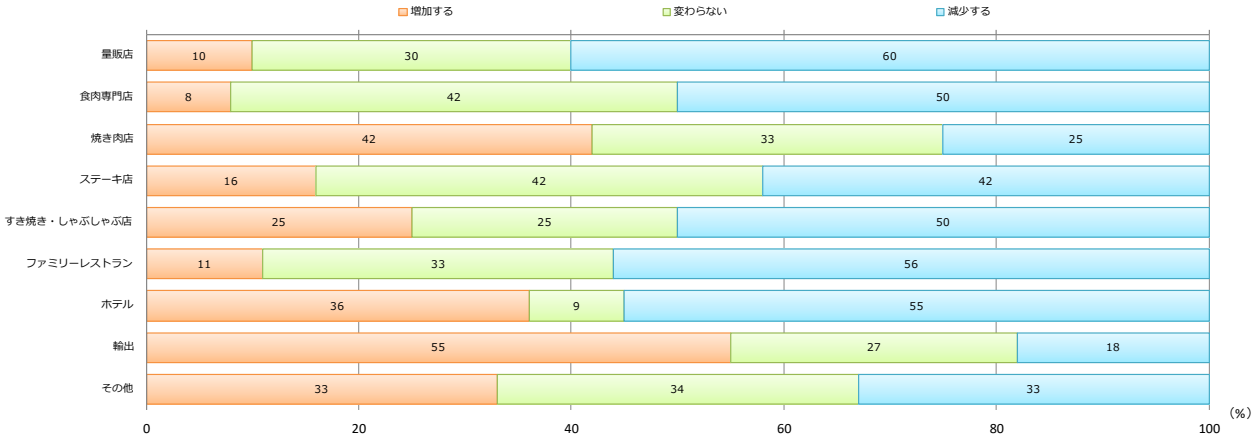
○2022年度下半期の卸売業者における和牛５等級の販売先別販売見通し（重量ベース）について、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**前回調査（2022年度上半期、和牛4,5等級）に引き続き、焼き肉店および輸出向けで「増加する」が「減少する」を上回った。**

○「増加する」が55%と最も多かった輸出向けについては、増加理由として、「販売先の増加」、「国を挙げての輸出拡大」などが挙げられた。また、焼き肉店向けについては、「COVID-19の収束が見込まれる」が最も多く挙げれた。

○一方、量販店向けの減少理由としては、「消費者の低価格志向」、「景気の停滞」などが挙げられた。

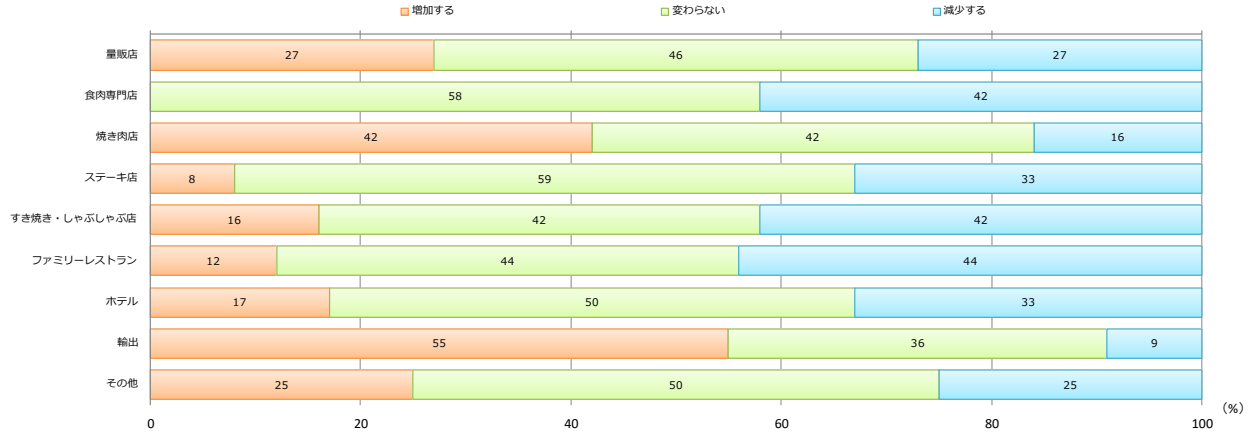
○また、和牛４等級の販売先別販売見通し（重量ベース）についても、**5等級と同様に、焼き肉店および輸出向けで「増加する」が「減少する」を上回った。**

2022年度下半期の和牛（５等級）の販売先別販売見通し（卸売業者）



注：重量ベース

2022年度下半期の和牛（４等級）の販売先別販売見通し（卸売業者）



注：重量ベース

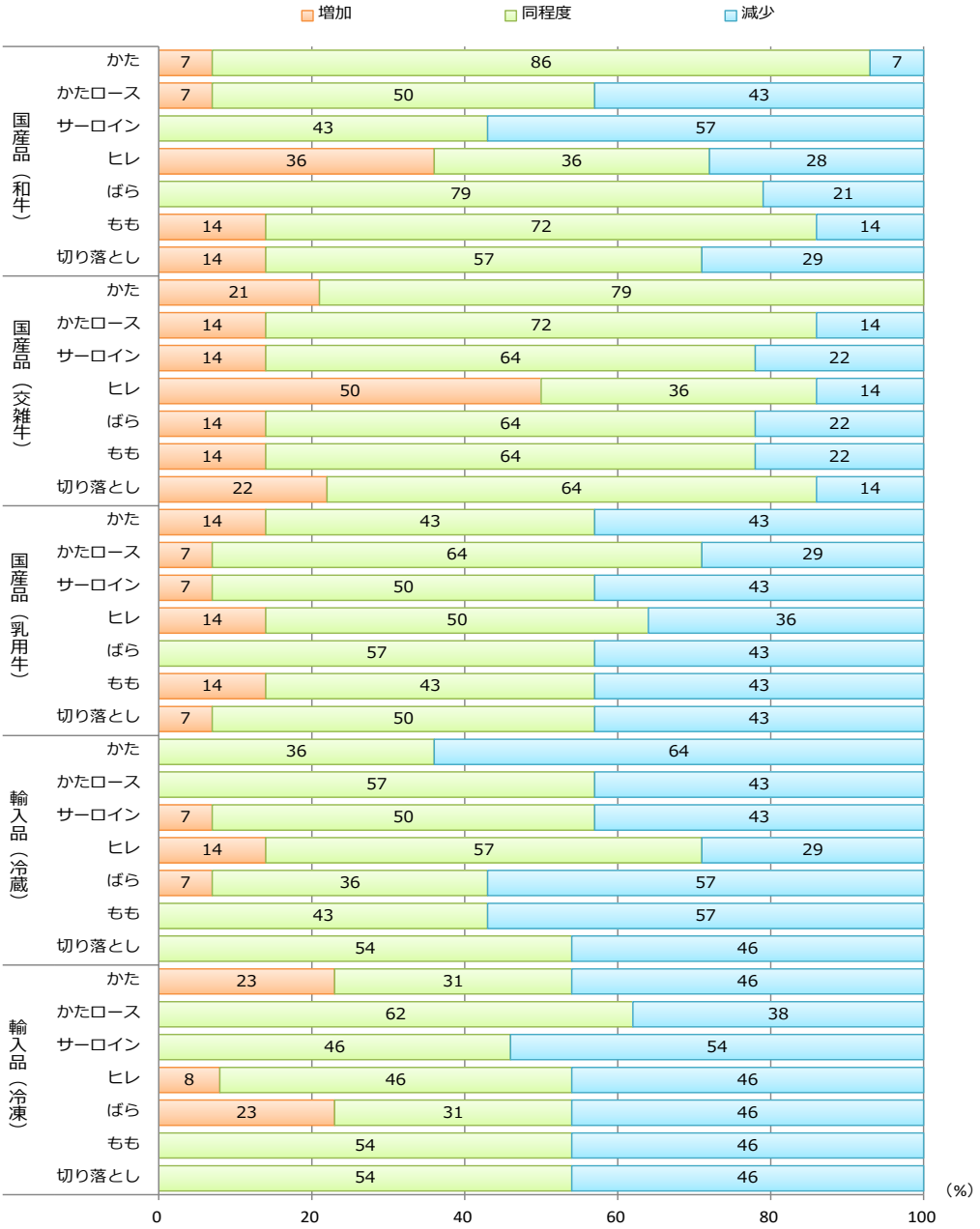
部位別販売見通し（牛肉）

～ 輸入品は「かた」、「ばら」を中心に減少傾向 ～

○2022年度下半期の卸売業者における牛肉の部位別販売見通し（重量ベース）について、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**国産品では、和牛の「サーロイン」と交雑牛の「ヒレ」を除いて「同程度」が最も多かった**（和牛の「ヒレ」は「増加」と「同程度」が同率）。和牛の「サーロイン」の減少理由としては、「消費者の低価格志向の強まり」、「国内需要の落ち込み」などが挙がった一方、交雑牛の「ヒレ」の増加理由としては、「外食・観光・ホテル需要の回復」などが挙げられた。

○**輸入品（冷蔵）では、「かたロース」、「サーロイン」、「ヒレ」および「切り落とし」は「同程度」が多かったものの、「かた」、「ばら」および「もも」においては「減少」が最も多かった。輸入品（冷凍）では、「かたロース」、「もも」および「切り落とし」は「同程度」が多かったものの、「かた」、「サーロイン」および「ばら」においては「減少」が最も多かった**（「ヒレ」は「同程度」と「減少」が同率）。減少の理由としては、「急激な円安」、「現地価格の高騰」などが挙げられた。

2022年度下半期の牛肉の部位別販売見通し



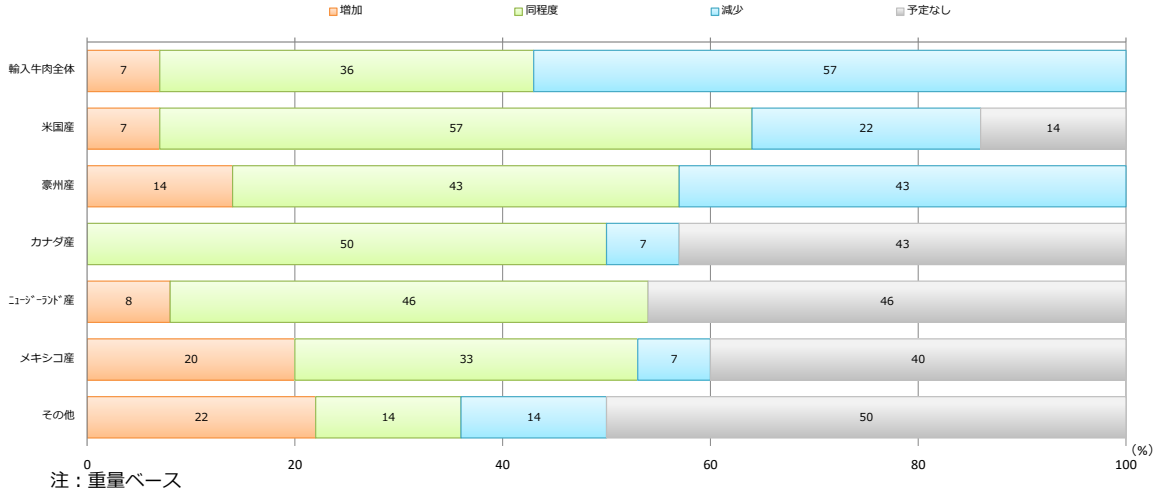
注：重量ベース

Ⅰ-5　輸入食肉の販売見通し（卸売業者・牛肉）

輸入牛肉の取扱見通し　～ 減少が増加を大きく上回る ～

○今後1年間の卸売業者における輸入牛肉の取扱見通し（重量ベース）については、**輸入牛肉全体では「減少」が「増加」を大きく上回った**。「減少」の理由としては、「円安」、「現地価格の高騰」、「COVID-19の影響」などが挙げられた。
○国別に見ると、豪州産は「減少」と「同程度」が同率、米国産およびカナダ産は「同程度」が最も多かったが、いずれも「減少」が「増加」を上回った。
○**米国産については、前回調査（2022年度上半期）に続き、今回調査でも「減少」が「増加」を上回った**。「減少」の理由としては、「円安」、「現地価格の高騰」、「COVID-19の影響」、「減産見込み」などが挙げられた。また、**豪州産についても、前回調査に続き、「減少」が「増加」を上回った**。「減少」の理由としては、「円安」、「現地価格の高騰」、「COVID-19の影響」、「他国産へのシフト」などが挙げられた。

今後1年間の輸入牛肉の取扱見通し（卸売業者）

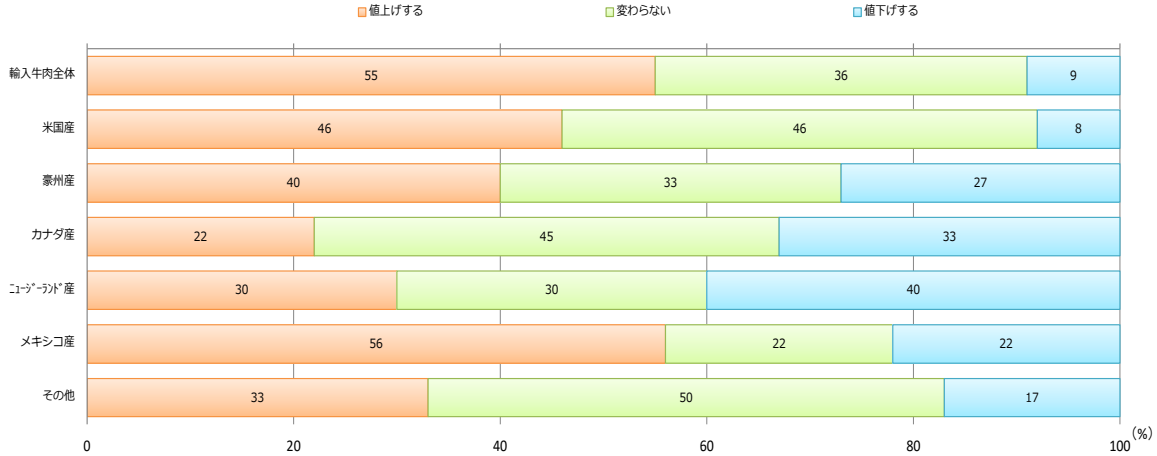


注：重量ベース

輸入牛肉の販売価格見通し　～ 「値上げ」が最多 ～

○今後1年間の卸売業者における輸入牛肉の販売価格見通しについて、**輸入牛肉全体では「値上げする」が55%と最も多かった**。
○国別に見ると、豪州産およびメキシコ産は「値上げする」、カナダ産は「変わらない」、米国産は「値上げする」および「変わらない」が最も多かった。一方、ニュージーランド産は「値下げする」が最も多かった。
○値上げの要因としては、「円安」、「現地価格の高騰」などが挙げられた。

今後1年間の輸入牛肉の販売価格見通し（卸売業者）

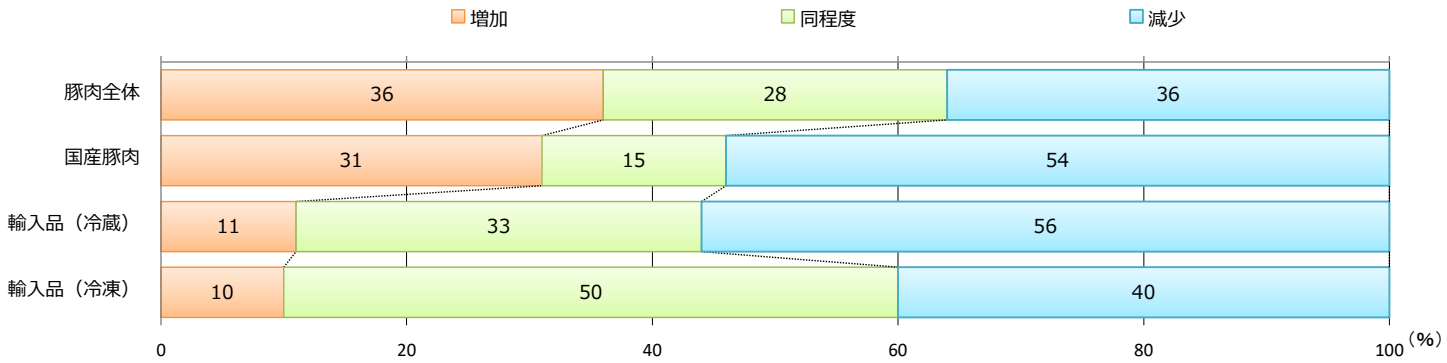


豚肉全体の取扱状況

～ 増加と減少で意見が分かれる ～

○2022年度上半期の卸売業者における豚肉全体の取扱状況（重量ベース）について、前回調査（2021年度下半期）との比較では、**「増加」と「減少」がいずれも36%と同率になった。**
○品目別に見ると、**国産豚肉および輸入品（冷蔵）は「減少」、輸入品（冷凍）は「同程度」がそれぞれ最も多かった**。
○増加理由については、国産豚肉で「小売向けおよび外食向け需要の増加」が挙げられた。
○減少理由については、全ての区分で「相場高」が挙げられたほか、国産豚肉では「景気の状況」、輸入品では「円安」、「消費者の低価格志向」、「現地価格の高騰」などが挙げられた。

2022年度上半期における豚肉の取扱状況



注：重量ベース

Ⅰ-7 仕向け先別販売割合・取扱状況（卸売業者・豚肉）

仕向け先別販売割合（豚肉）

～ 輸入品（冷凍）を除き「量販店･食肉専門店」向けが最多 ～

○2022年度上半期の卸売業者における豚肉の仕向け先別販売割合の実績（重量ベース）を見ると、**輸入品（冷凍）を除いた全ての区分で「量販店･食肉専門店」が最も多かった。**

○「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると、**「量販店･食肉専門店」への仕向け割合は、国産品（冷蔵）65%、国産品（冷凍）33%、輸入品（冷蔵）46%**となり、前回調査と比較すると全ての区分で減少した。

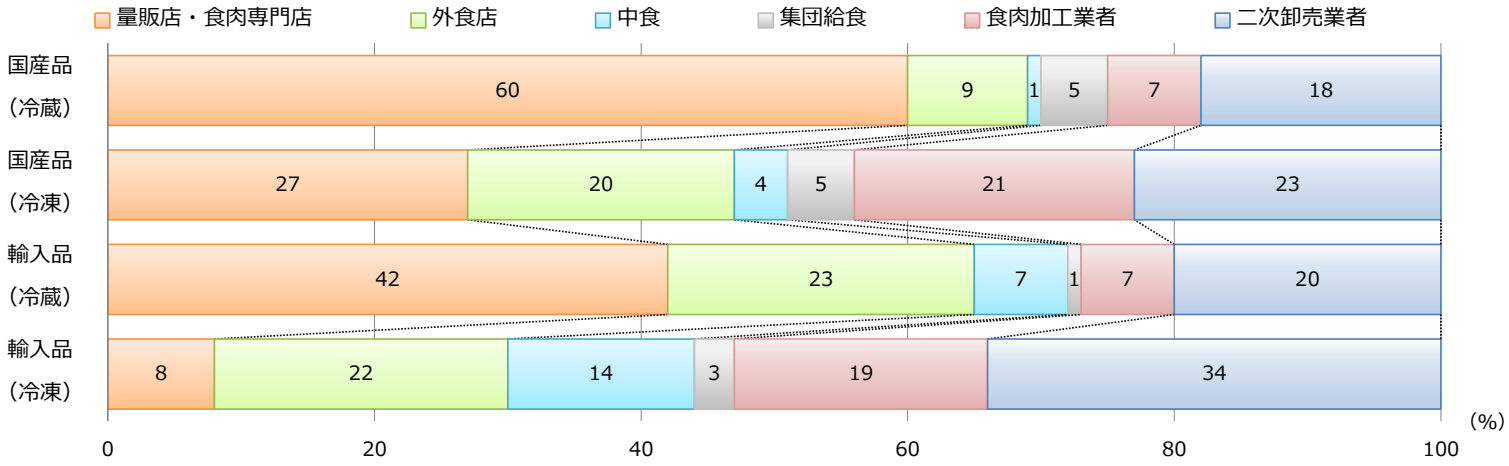
○輸入品（冷凍）については、「二次卸売業者」が34%と最も多いが、「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると、「外食店」、「中食」、「集団給食」および「食肉加工業者」の合計で全体の7割以上を占めることがわかる。

○「外食店」の内訳を見ると、国産品（冷蔵）および輸入品（冷蔵）は「とんかつ・ステーキ店」、国産品（冷凍）は「焼き肉店」、輸入品（冷凍）は「ホテル」が最も多かった。

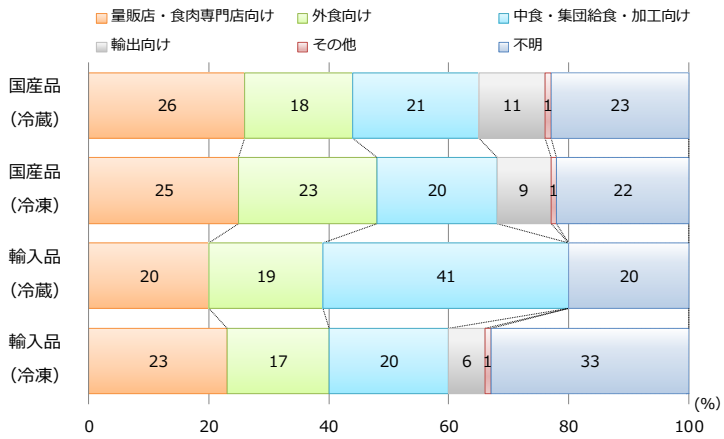
○「食肉加工業者」の加工仕向の内訳では、「ハム・ソーセージ」向けが最も多く、次いで「ハンバーグ」向け、「レトルト食品」向けであった。

○なお、国産品における冷蔵と冷凍の構成比は、冷蔵が73%、冷凍が27%となった。

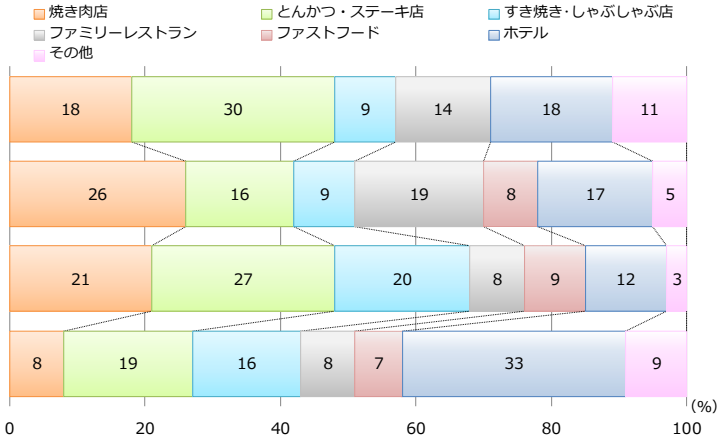
2022年度上半期の仕向け先別販売割合（豚肉）



＜参考＞二次卸売業者の最終仕向け先



＜参考＞外食店の内訳



注：データは、各者の仕向先別販売割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

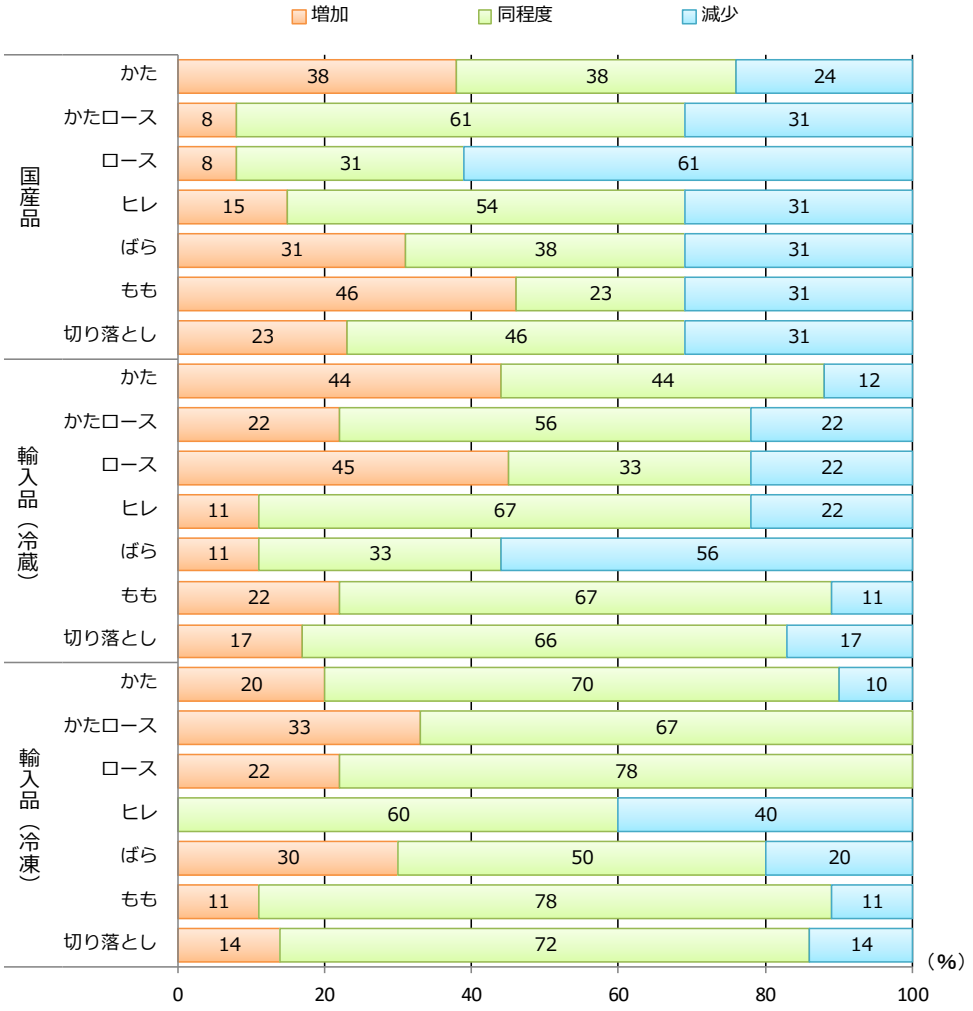
部位別販売見通し（豚肉）

～ 国産品は「もも」で増加が最多 ～

○2022年度下半期の卸売業者における豚肉の部位別販売見通し（重量ベース）について、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**国産品については、「もも」は「増加」、「かた」は「増加」および「同程度」がそれぞれ最も多かった。一方、「ロース」は「減少」が最も多く、それ以外の部位では「同程度」が最も多かった。**「もも」の増加理由としては、「消費者の低価格志向」などが挙げられた。一方、「ロース」の減少理由としては、「消費者の低価格志向」、「外食需要の回復の遅れ」などが挙げられた。

○**輸入品については、冷蔵の「ロース」、「ばら」を除いた全ての部位において「同程度」が最も多かった**（冷蔵の「かた」は「増加」と「同程度」が同率）。なお、「減少」が過半を占めた輸入品（冷蔵）の「ばら」の理由としては、「現地相場の高騰」などが挙げられた。

2022年度下半期の豚肉の部位別販売見通し



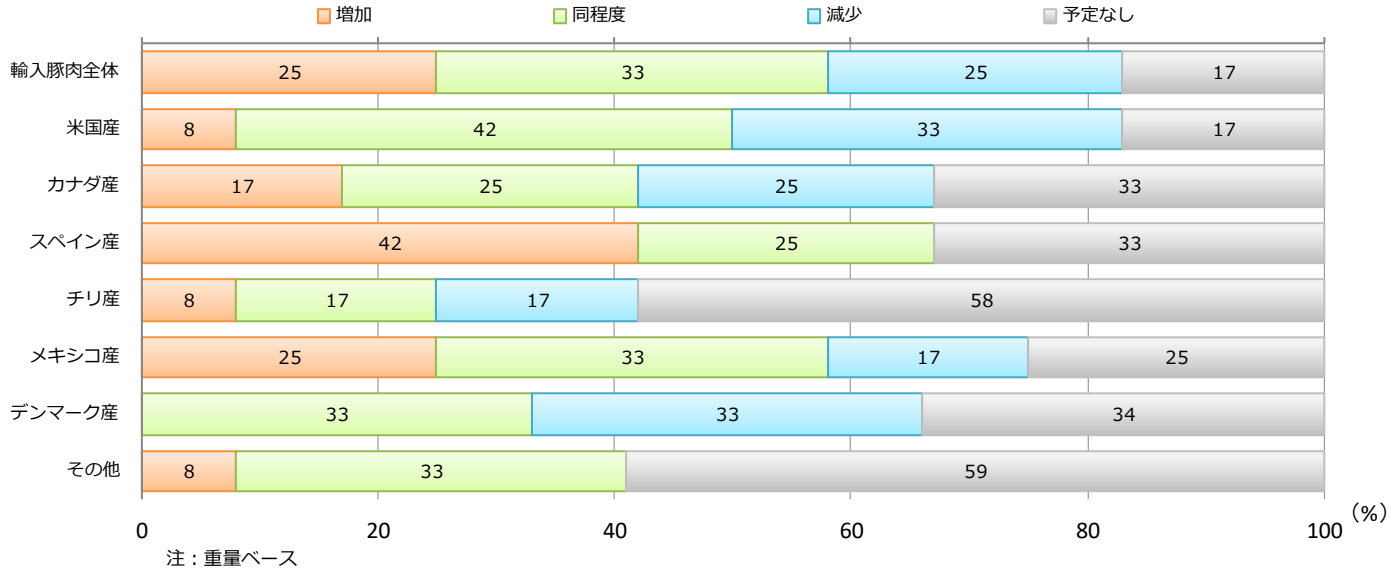
注：重量ベース

Ⅰ-９　輸入食肉の販売見通し（卸売業者・豚肉）

輸入豚肉の取扱見通し　～ 同程度の見通しが最多も、増加と減少が同率 ～

○今後1年間の卸売業者における輸入豚肉の取扱見通し（重量ベース）については、**輸入豚肉全体では「同程度」が最も多く、次いで「増加」と「減少」が同率となった**。
○国別に見ると、スペイン産は「増加」が最も多くなったほか、米国産およびメキシコ産については「同程度」が最も多い中、米国産は「減少」が「増加」を上回り、メキシコ産は「増加」が「減少」を上回った。また、カナダ産、チリ産およびデンマーク産は「同程度」と「減少」が同率と、それぞれ違いが大きい結果となった。
○スペイン産の「増加」の理由としては、「他国産に比べると安価なため」、「デンマーク産の価格高騰によるシフト」などが挙げられた。

今後1年間の輸入豚肉の取扱見通し（卸売業者）

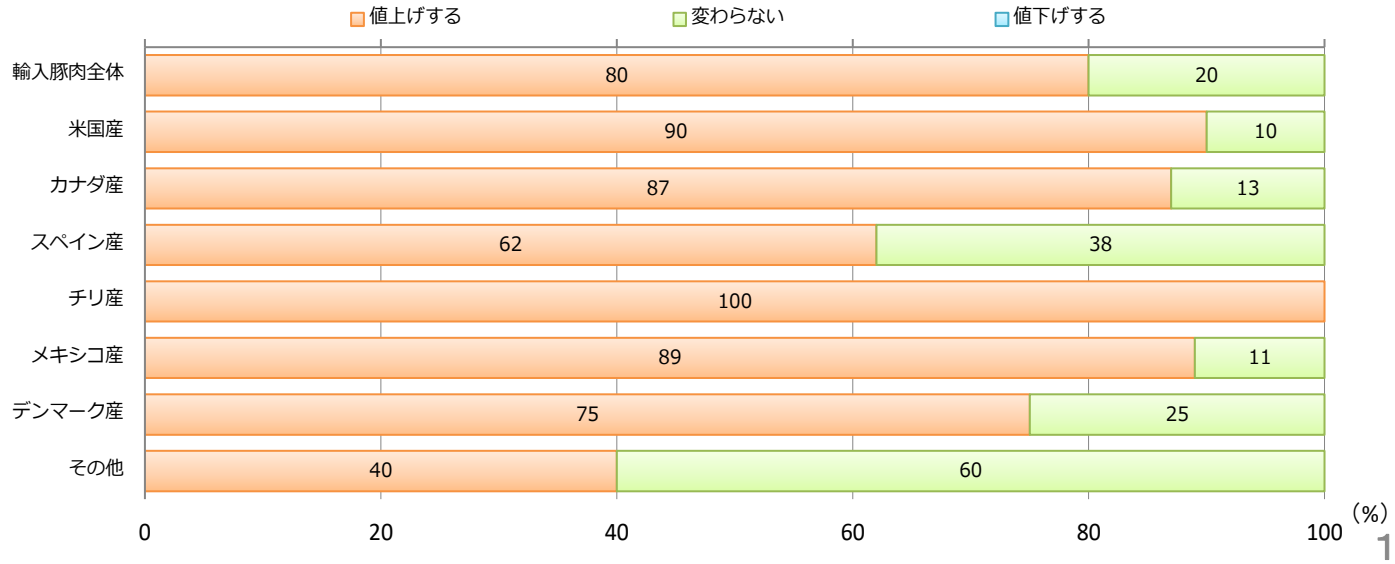


注：重量ベース

輸入豚肉の販売価格見通し　～「値下げ」の回答は無し～

○今後1年間の卸売業者における輸入豚肉の販売価格見通しについては、「その他」を除いて**「値上げする」という回答が最多**で、**「値下げする」という回答は無かった**。
○値上げの要因としては、「円安」、「現地相場の高騰」などが挙げられた。

今後1年間の輸入豚肉の販売価格見通し（卸売業者）

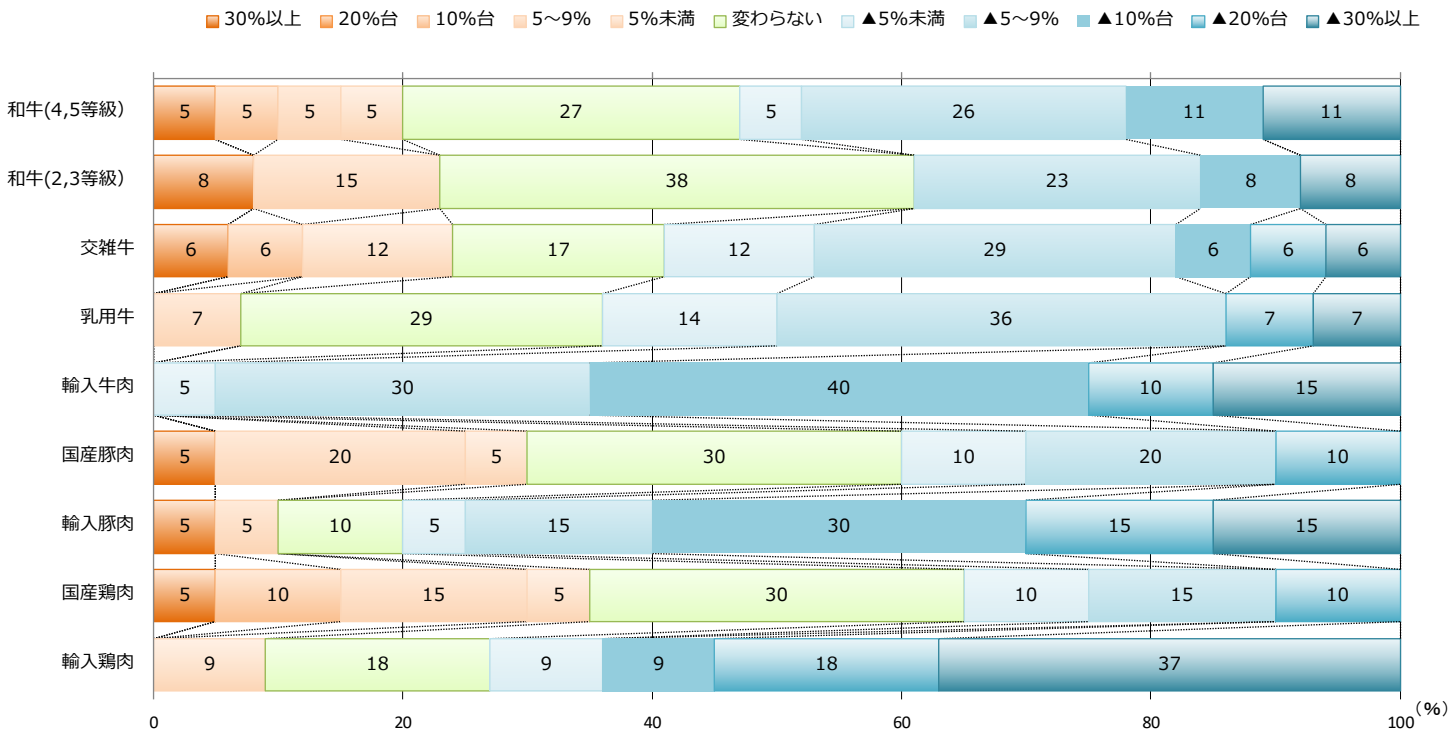


販売量の増減割合（量販店）

～ 国産鶏肉を除き減少が最多。輸入品の減少が顕著 ～

○2022年度上半期の量販店における食肉販売量の増減割合について、前年同期（2021年度上半期）との比較では、**国産鶏肉を除いた全ての区分で減少の割合が多い結果となった**。
○品種別の減少割合を見ると、特に、**輸入品における全体を占める減少の割合が、輸入牛肉で100%、輸入豚肉で80%、輸入鶏肉で73%となっており、輸入牛肉および輸入豚肉では「▲10%台」、輸入鶏肉では「▲30%以上」が最も多かった。**
○輸入品の減少理由については、「現地価格の高騰」、「内食需要の減少」、「COVID-19の影響による現地の物流の乱れ」、「高病原性鳥インフルエンザの影響」などが挙げられた。
○一方、**国産品における全体を占める減少の割合は、和牛（4,5等級）で53%、交雑牛で59%、乳用牛で64%となっており、国産鶏肉では「増加」と「減少」が同率であった。**また、全ての国産品で「▲5~9%」が最も多かった。
○国産品の減少理由については、「販売不振」、「消費者の低価格志向」、「内食需要の減少」などが挙げられた。

食肉販売量の増減割合（量販店）

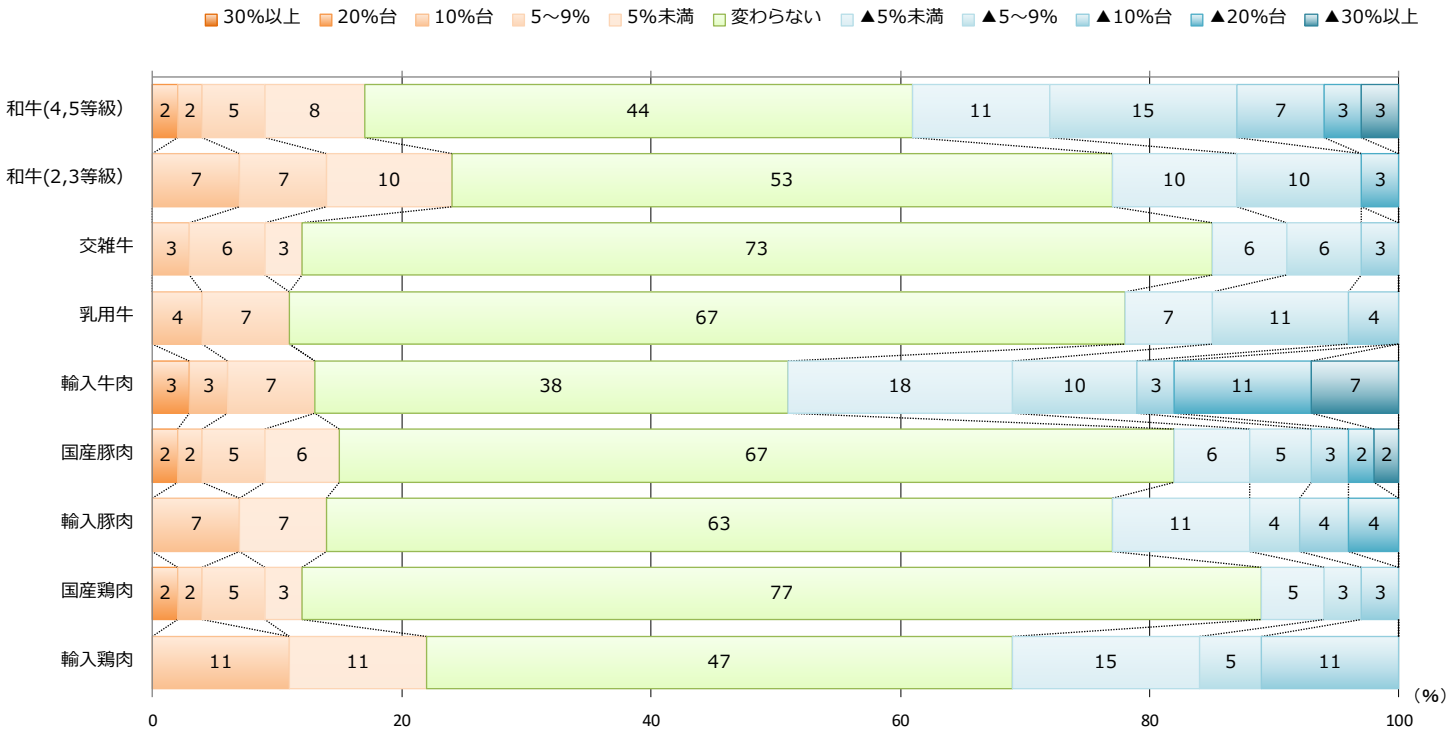


販売量の増減割合（食肉専門店）

～ 輸入牛肉で「減少」が最多 ～

○2022年上半期の食肉専門店における食肉販売量の増減割合は、前年同期（2021年度上半期）との比較で、**輸入牛肉を除いた全ての区分で「変わらない」が最も多い中、輸入牛肉は「減少」が最も多い結果となった。**
○輸入牛肉の減少理由については、「現地価格の高騰」などが挙げられた。

食肉販売量の増減割合（食肉専門店）

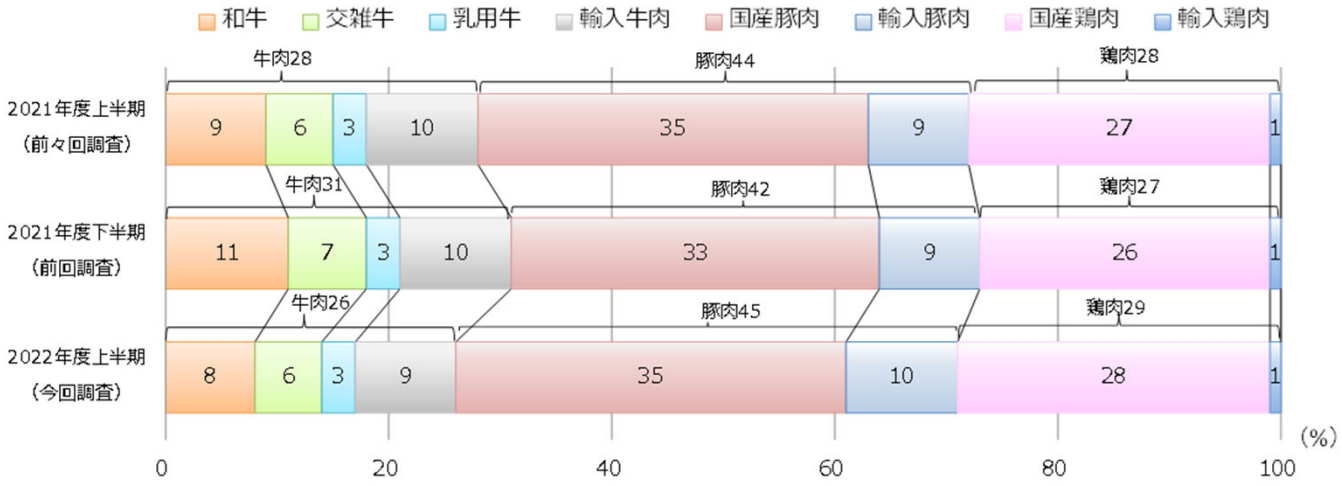


食肉の取扱割合（量販店）

～ 牛肉が2ポイント減少、豚肉と鶏肉が各1ポイント増加 ～

○2022年度上半期の量販店における食肉取扱割合の実績（重量ベース）は、**牛肉が26%、豚肉が45%、鶏肉が29%**となった。
○前年同期（2021年度上半期）と比較すると、牛肉が2ポイント減少した一方、豚肉および鶏肉がそれぞれ1ポイントずつ増加した。

食肉の取扱割合（量販店）



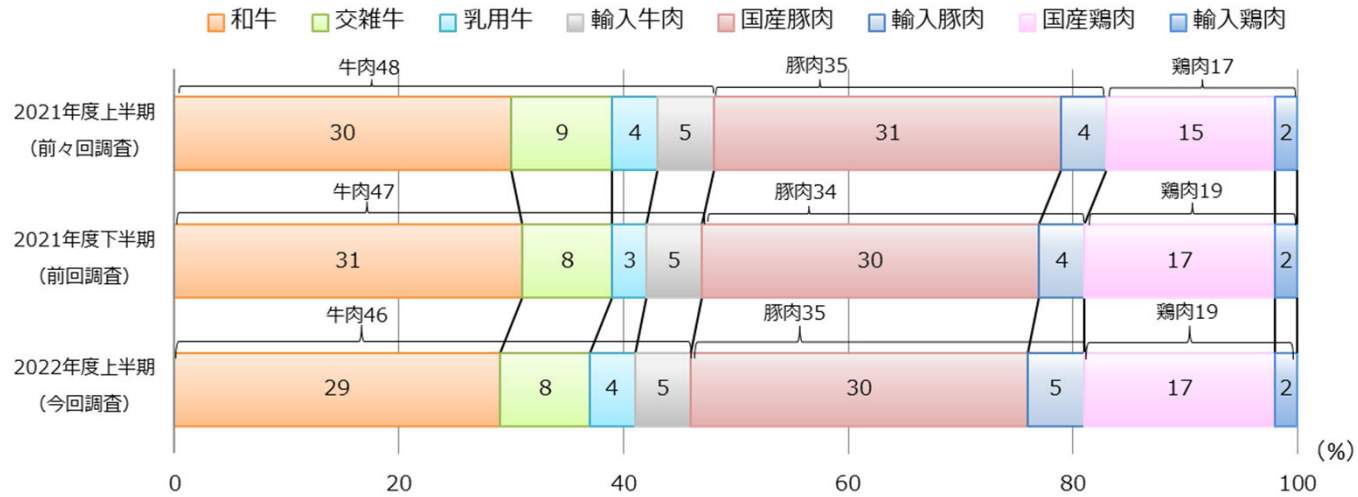
注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

食肉の取扱割合（食肉専門店）

～ 牛肉が2ポイント減少、鶏肉が2ポイント増加 ～

○2022年度上半期の食肉専門店における食肉取扱割合の実績（重量ベース）は、**牛肉が46%、豚肉が35%、鶏肉が19%**となった。食肉専門店は、量販店と比べて和牛の取扱割合が高く、輸入食肉の取扱割合が低いことがうかがえる。
○前年同期（2021年度上半期）と比較すると、牛肉が2ポイント減少した一方、鶏肉が2ポイント増加した。

食肉の取扱割合（食肉専門店）



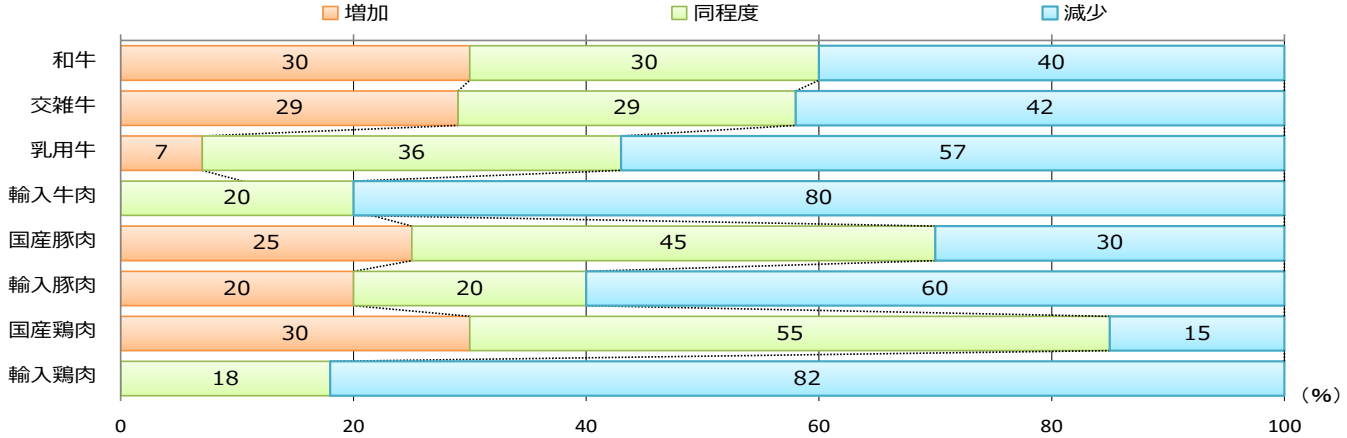
注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

食肉の販売見通し（量販店）

～ 特に輸入品で減少の見通し ～

○2022年度下半期の量販店における食肉販売見通し（重量ベース）について、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**国産豚肉および国産鶏肉を除いて「減少」が最も多く**、国産鶏肉以外の全てで「減少」が「増加」を上回る結果となった。
○減少の理由としては、輸入牛肉、輸入豚肉、輸入鶏肉ともに「仕入価格上昇分の価格転嫁」が最も多く挙げられ、次いで「特売回数の減少」、「他畜種への需要シフト」などが挙げられた。乳用牛は「他畜種への需要シフト」、和牛および交雑牛は「景気の状況」が多く挙げられたほか、前年同期にみられたCOVID-19からの回復に伴う「内食需要の減少」なども一因として挙げられた。
○一方、増加の理由としては、和牛で「特売回数の増加」、交雑牛および国産鶏肉で「輸入品からの需要のシフト」が多く挙げられた。

2022年度下半期の食肉販売見通し（量販店）



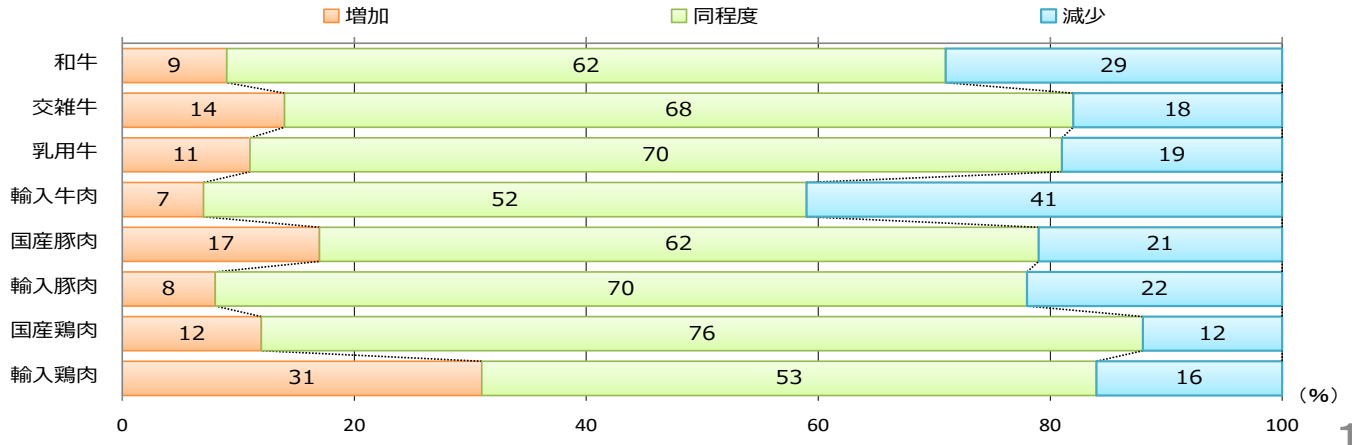
注：重量ベース

食肉の販売見通し（食肉専門店）

～ 全ての区分で「同程度」が最も多い見通し～

○2022年度下半期の食肉専門店における食肉販売見通し（重量ベース）について、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**全ての区分で「同程度」が最も多い結果となった**。
○輸入牛肉は「減少」の割合が他の区分と比べて最も高く、その理由としては、「仕入価格上昇分の価格転嫁」や「景気の状況」などが多く挙げられた。
○一方、輸入鶏肉は「増加」の割合が他の区分と比べて最も高く、その理由としては、「他畜種からの需要シフト」、「景気の状況」などが多く挙げられた。

2022年度下半期の食肉販売見通し（食肉専門店）



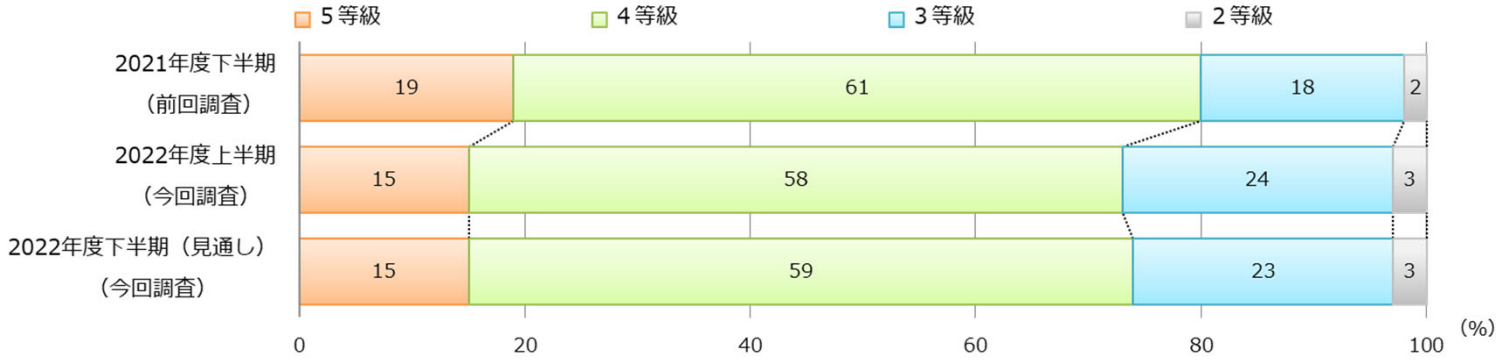
注：重量ベース

取扱割合（量販店）

～ 量販店では5等級が2割弱、4等級以上で7割強 ～

○2022年度上半期の量販店における和牛の等級別取扱割合の実績（重量ベース）については、**4等級が58%と最も多く、次いで3等級が24%、5等級が15%、2等級が3%**となった。
○2022年度下半期の量販店における和牛の等級別取扱割合の見通し（重量ベース）については、**4等級が59%と最も多く、次いで3等級が23%、5等級が15%、２等級が3%**となった。前年同期（2021年度下半期）と比べて5等級が4ポイント減少する一方、3等級が5ポイント増加する見通しとなった。
○主な部位としては、4等級は「もも」が最も多く、次いで「ばら」であった。なお、同等級の前年同期（2021年度下半期）では「リブロース・サーロイン」および 「もも」が最も多かった。

和牛の等級別取扱割合（量販店）



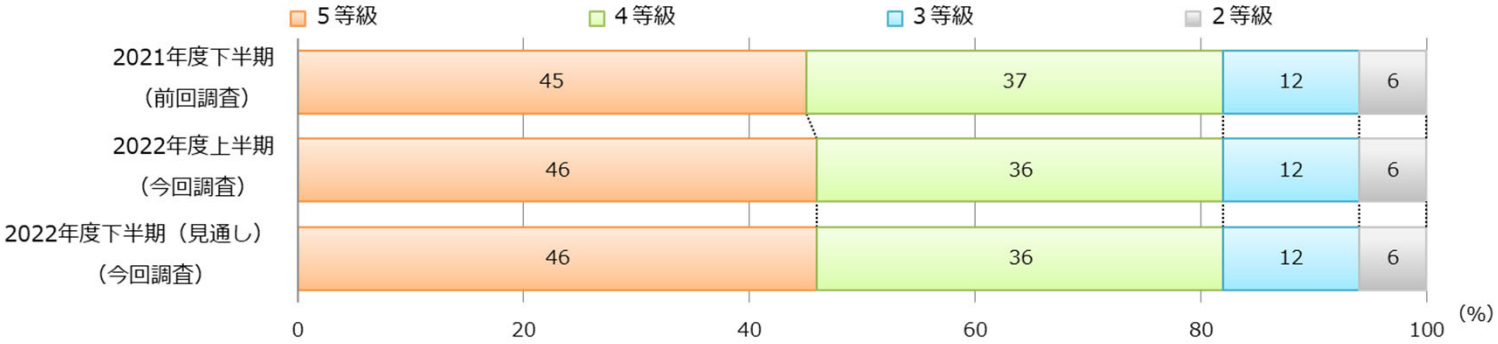
注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

取扱割合（食肉専門店）

～ 食肉専門店では5等級のみで5割弱 ～

○2022年度上半期の食肉専門店における和牛の等級別取扱割合の実績（重量ベース）については、**５等級が46%と最も多く、次いで４等級が36%、３等級が12%、２等級が6%**となった。
○2022年度下半期の食肉専門店における和牛の等級別取扱割合の見通し（重量ベース）については、**５等級が46%と最も多く、次いで４等級が36%、３等級が12%、２等級が6%**となり、 前年同期（2021年度下半期）と比べて5等級は1ポイント増加する一方、4等級は1ポイント減少する見通しとなった。
○主な部位としては、５等級は「リブロース・サーロイン」、4等級は「もも」が最も多かった。例年どおり、ロイン系やももが主体となっている。

和牛の等級別取扱割合（食肉専門店）



注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

販売見通し（量販店）

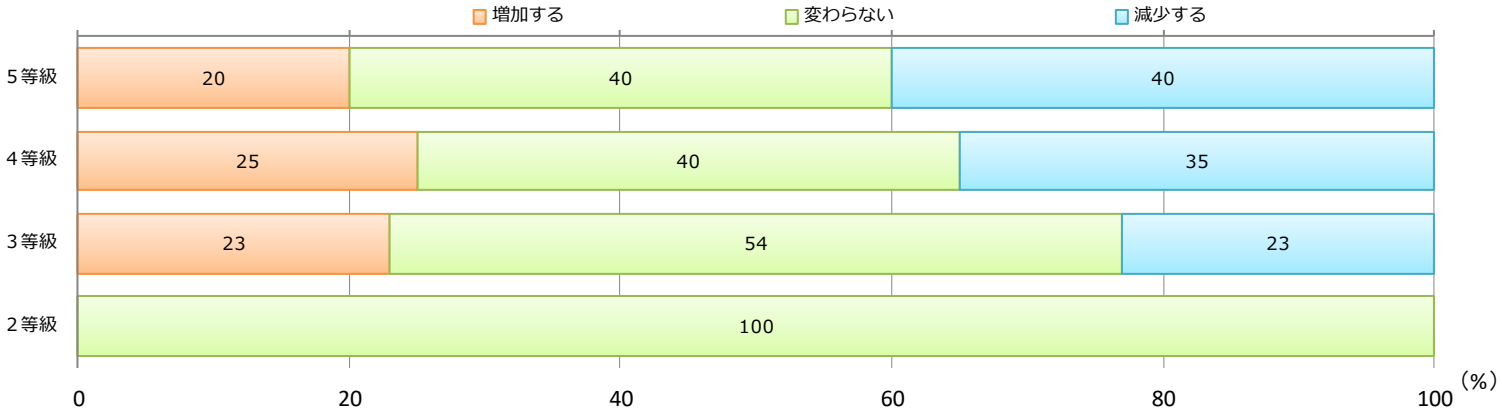
～おおむね同程度の見通しが最多～

○2022年度下半期の量販店における和牛の等級別販売見通しについて、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**2等級、3等級および4等級で「変わらない」が最も多い中、4等級は「減少する」が「増加する」を上回った一方、3等級は「増加する」と「減少する」が同率であった**。また、**5等級は「変わらない」および「減少する」が最も多かった。**

○5等級の減少理由としては、「相場高」、「景気の停滞」、「消費者の低価格志向」が多く挙げられた。

○3等級、4等級および５等級の増加理由としては、「小売向け需要の増加」、「相場安」、「景気の状況」、「在庫量の増加」などが挙げられた。

2022年度下半期の和牛の等級別販売見通し（量販店）



注：重量ベース

販売見通し（食肉専門店）

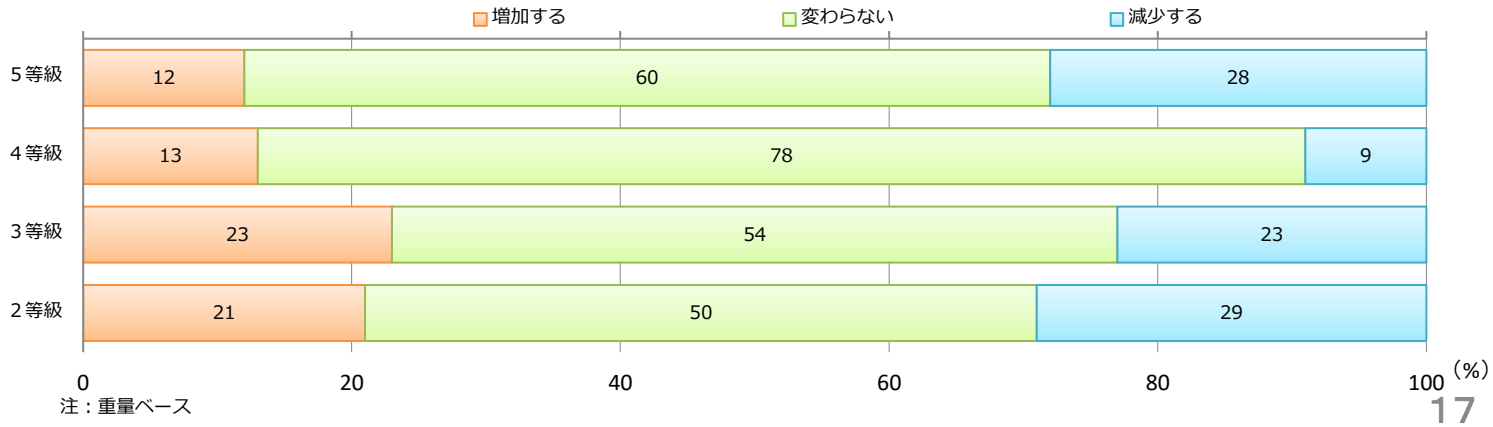
～ 同程度の見通しが最多～

○2022年度下半期の食肉専門店における和牛の等級別販売見通しについて、前年同期（2021年度下半期）と比較では、**全ての等級で「変わらない」が最も多い中、5等級および2等級は「減少する」が「増加する」を上回った一方、4等級は「増加する」が「減少する」を上回った。3等級は「増加する」と「減少する」が同率となった。**

○増加理由として、4等級および５等級は「小売向け需要の増加」、3等級は「小売向け需要の増加」と「消費者の低価格志向」が多く挙げられた。

○減少理由として、５等級は「小売向け需要の減少」と「相場高」、4等級は「外食向け需要の増加」と「消費者の低価格志向」、3等級は「小売向け需要の減少」が多く挙げられた。

2022年度下半期の和牛の等級別販売見通し（食肉専門店）



注：重量ベース

通常価格（量販店）

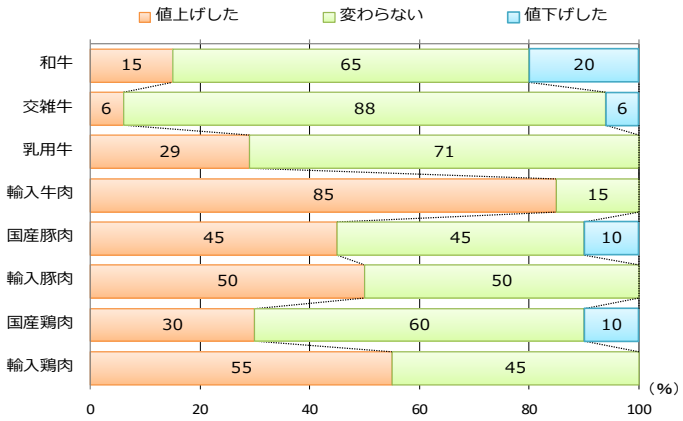
～輸入品を中心に値上げ傾向～

○2022年度上半期の量販店における小売価格の実績について、前年同期（2021年度上半期）との比較では、**輸入牛肉および輸入鶏肉で「値上げした」がそれぞれ85%、55%と最も多かった。また、輸入品および国産豚肉を除いた全ての区分で「変わらない」が最も多い中、乳用牛、国産鶏肉は「値上げした」が「値下げした」を上回った。**

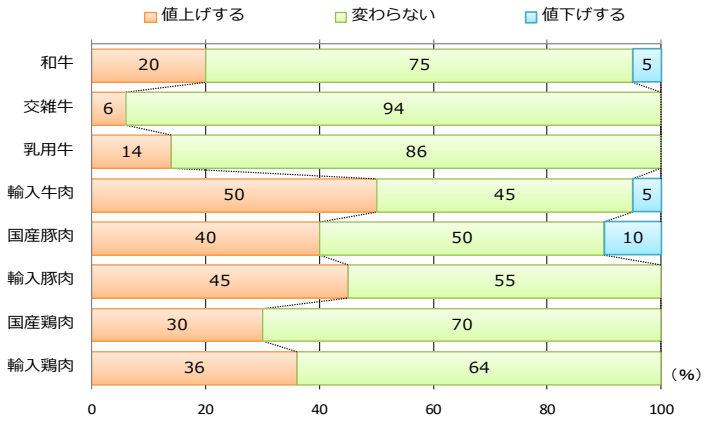
○2022年度下半期の量販店における小売価格の見通しについて、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**輸入牛肉は「値上げする」が最も多かった。**また、**輸入牛肉を除いた全ての区分で「変わらない」が最も多いものの、「値上げする」が「値下げする」を上回った。**

食肉の小売価格（量販店）

2022年度上半期の小売価格（実績）



2022年度下半期の小売価格（見通し）



通常価格（食肉専門店）

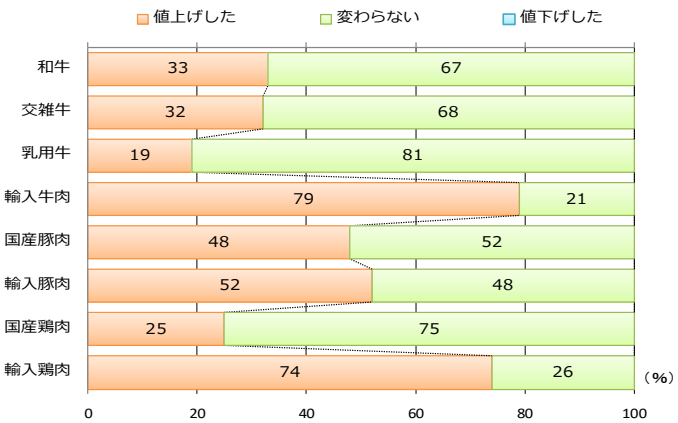
～国産品は据え置きも、輸入品は値上げ傾向～

○2022年度上半期の食肉専門店における小売価格の実績について、前年同期（2021年度上半期）との比較では、**輸入品は「値上げした」が最も多く、国産品は「変わらない」が最も多かった。**

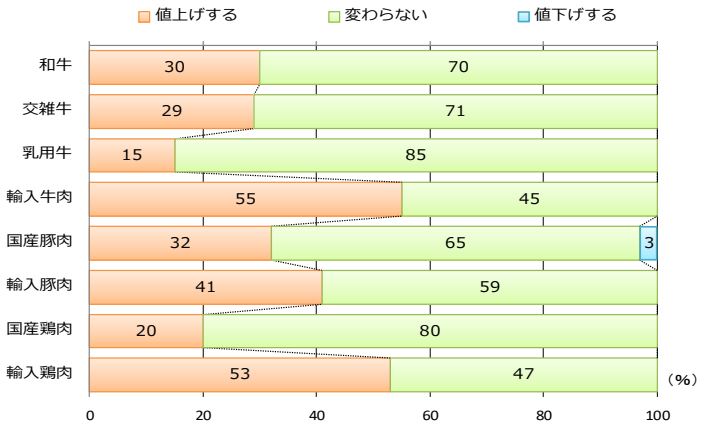
○2022年度下半期の食肉専門店における小売価格の見通しについて、前年同期（2021年度下半期）との比較では、**輸入牛肉および輸入鶏肉は「値上げする」が最も多く、それ以外の区分は「変わらない」が最も多かった。**

食肉の小売価格（食肉専門店）

2022年度上半期の小売価格（実績）



2022年度下半期の小売価格（見通し）



量販店

～豚肉・鶏肉は「総菜や味付け肉の強化」が最多～

○量販店における販売拡大に向けた対応については、**牛肉**では**１位（最多）が「低級部位や切り落としを増やす」**、２位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」および「総菜や味付け肉の強化」となった。

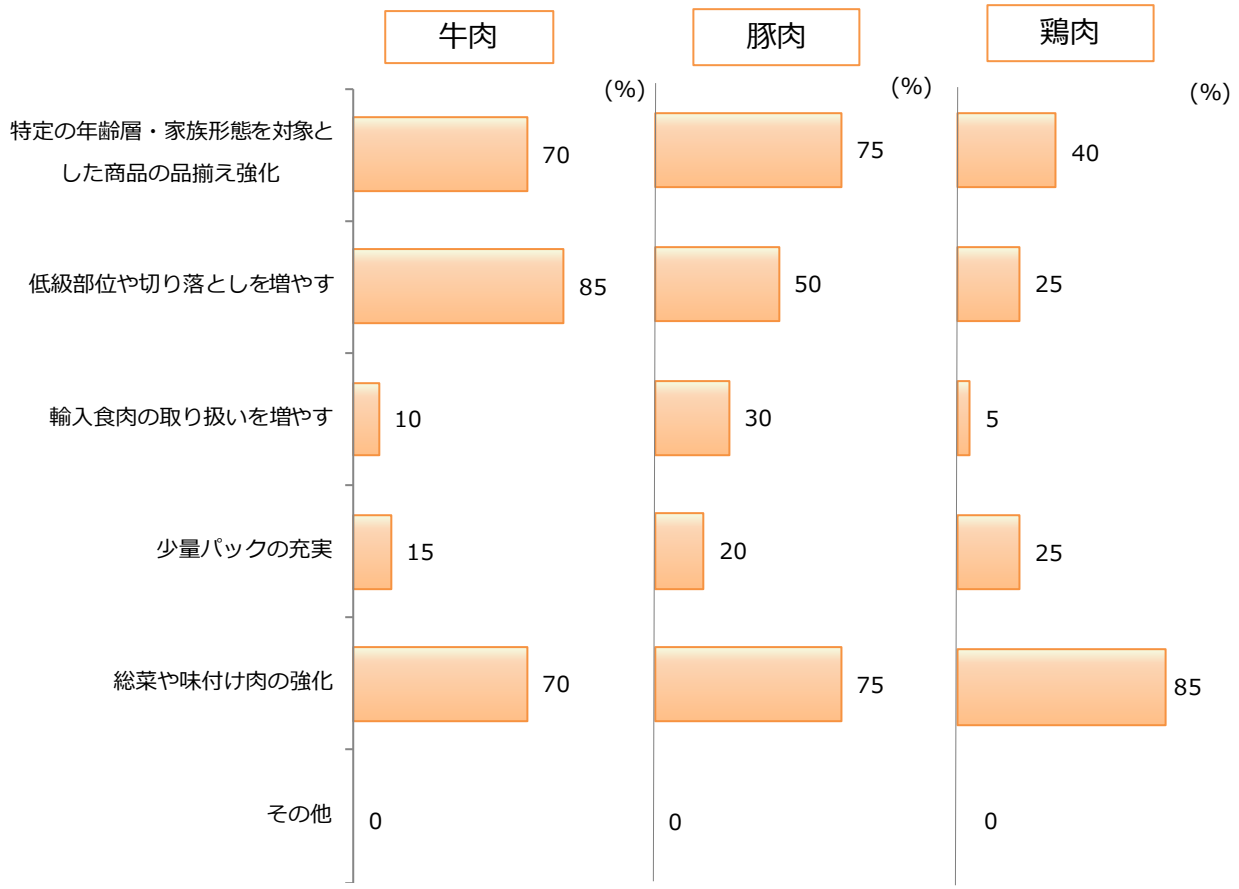
○**豚肉**では**１位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」および「総菜や味付け肉の強化」**、3位が「低級部位や切り落としを増やす」となった。

○**鶏肉**では**１位が「総菜や味付け肉の強化」**、 2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、３位が「低級部位や切り落としを増やす」 および「少量パックの充実」となった。

○牛肉・豚肉・鶏肉の全てにおいて、「総菜や味付け肉の強化」という回答が多く、COVID-19の影響による内食需要の高止まりを背景に、時短・簡便商品の取扱量の増加による販売拡大への取り組みがみられる。

○具体的な対応としては、「精肉から簡便商品へのシフトが顕著であることから、鍋商材を中心とした簡便商品の拡充を図る」、「味付焼肉については、こだわりのタレの開発を行い安売りにならない商品開発を継続して実施する」、「追いダレなど手作り志向に対応した総菜メニュー提案強化する」、「時短、簡便商品として需要が増加しているキット品や冷凍品の総菜アイテムを増やしていく」、「焼肉セットやしゃぶしゃぶセット、希少部位セットなどを用いて客単価・個単価のアップを図る」、「30～40代をターゲットにした大型サイズパックを拡大する」などが挙げられた。

販売拡大に向けた対応（量販店）

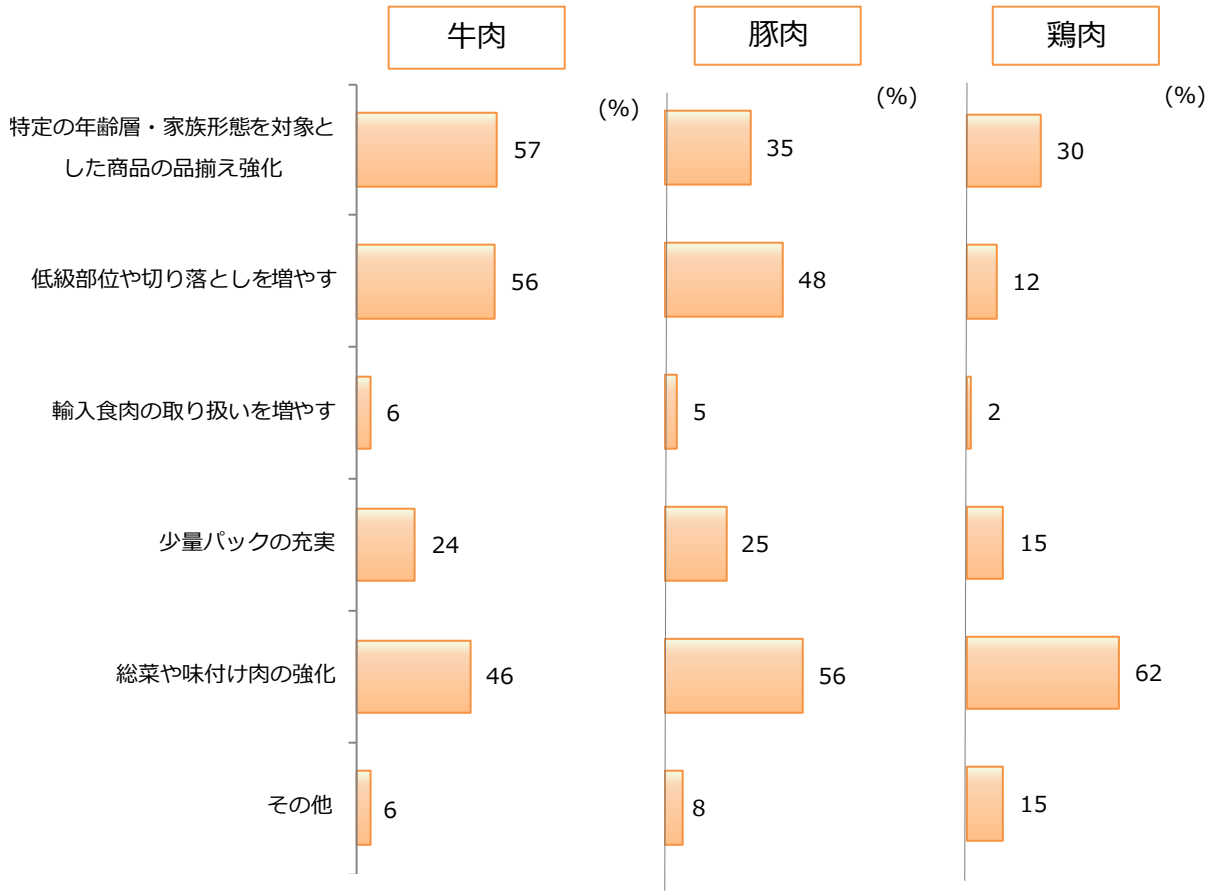


注：複数回答

食肉専門店　～豚肉・鶏肉は「総菜や味付け肉の強化」が最多～

○食肉専門店における販売拡大に向けた対応については、**牛肉**では**１位（最多）が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」**、２位が「低級部位や切り落としを増やす」、3位が「総菜や味付け肉の強化」となった
○**豚肉**では**１位が「総菜や味付け肉の強化」**、２位が「低級部位や切り落としを増やす」、3位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」となった。
○**鶏肉**では**１位が「総菜や味付け肉の強化」**、２位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」などとなった。
○具体的な対応としては、「世帯人数の減少による個食化に対応した少量パックなどの少量販売の強化」、「COVID-19の影響のため景気後退気味であるが、人の流れはあるので地鶏など顧客ニーズに合ったアイテムを増やしていきたい」、「焼肉セットや総菜など自社製造の冷凍食品で冷凍ギフト分野の新しい市場を開拓する」、「冷凍自動販売機で半加工品や総菜を販売して、営業時間外にも売上を確保する」、「物価高騰対策として、お得パックや調理法の提案に注力し、売上を伸ばしたい」、「ここ数年SNSの効果的な運用などで順調に客数を伸ばしてきた。今後は、原点に戻り対面販売の良さを活かした丁寧な接客を心掛けて、顧客の満足度を上げたい」などが挙げられた。

販売拡大に向けた対応（食肉専門店）



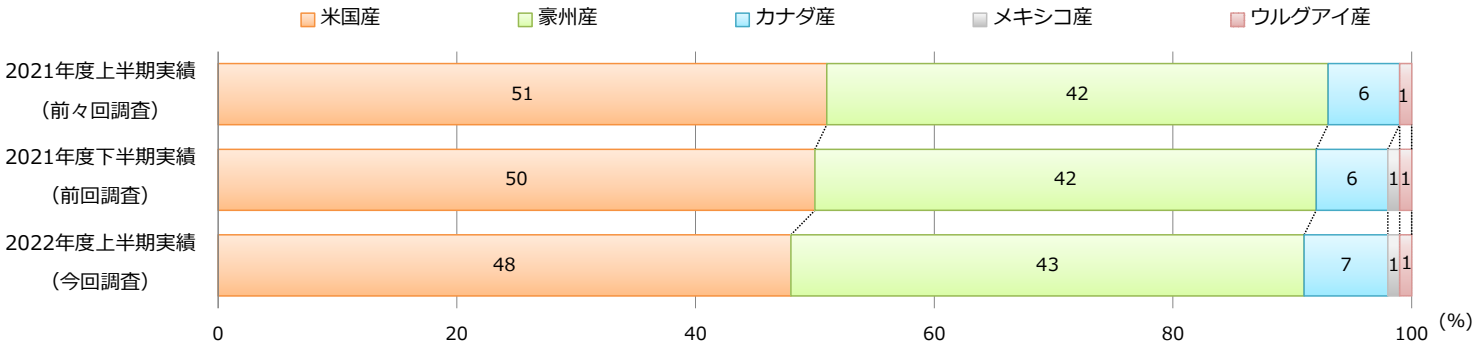
注：複数回答

輸入牛肉の取扱割合実績（量販店）

～ 米国産が5割、豪州産が4割 ～

○2022年度上半期の量販店における輸入牛肉の取扱割合は、**米国産が48%で最も多く、次いで豪州産が43%となった**。次いでカナダ産が7%、メキシコ産およびウルグアイ産がそれぞれ１%となった。
○前年同期（2021年度上半期）の取扱割合と比べると、米国産が3ポイント減少した一方、豪州産、カナダ産、メキシコ産がそれぞれ1ポイントずつ増加した。

輸入牛肉の取扱割合（量販店）



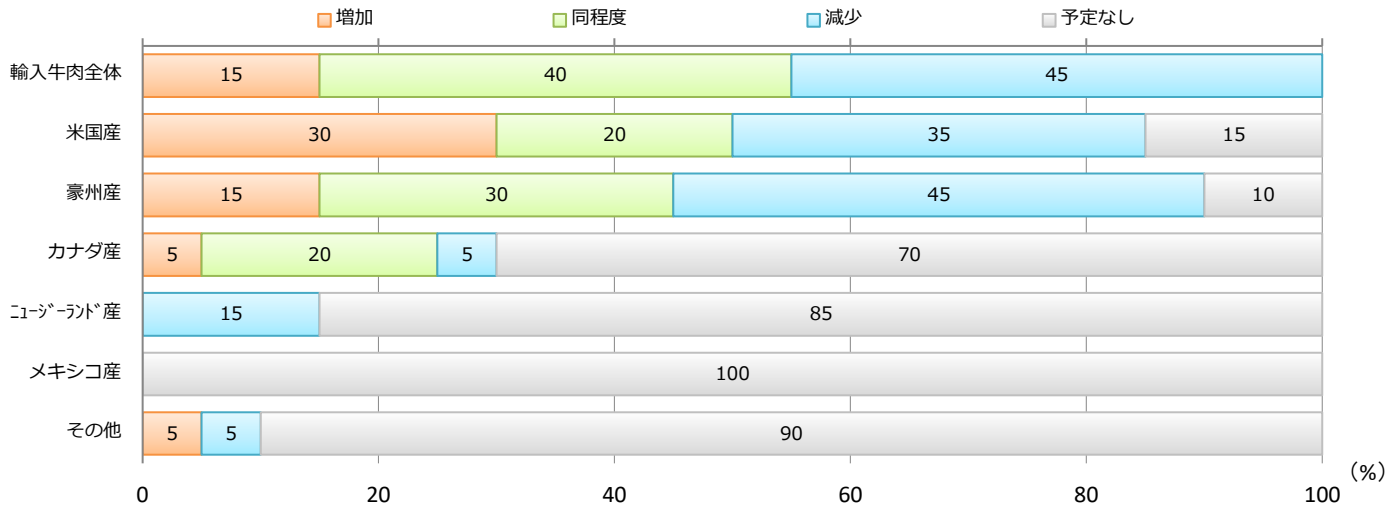
注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

輸入牛肉の取扱見通し（量販店）

～ 米国産、豪州産ともに減少が最多 ～

○今後1年間の量販店における輸入牛肉の取扱見通し（重量ベース）については、**輸入牛肉全体では「減少」が45%で最も多く、次いで「同程度」が40%、「増加」が15%であった。**
○国別に見ると、**米国産および豪州産で「減少」が最も多かった。**
○減少の理由としては、「現地価格の高騰」、「円安」、「需要の低下」、「先行き不透明なCOVID-19の状況」などが挙げられた。

今後1年間の輸入牛肉の取扱見通し（量販店）



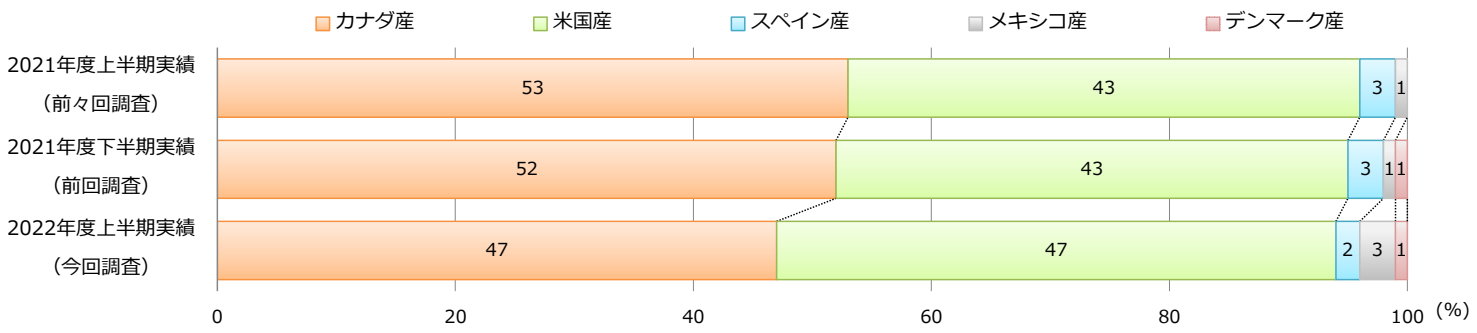
注：重量ベース

輸入豚肉の取扱割合実績（量販店）

～ カナダ産、米国産がともに5割弱 ～

○2022年度上半期の量販店における輸入豚肉の取扱割合は、**カナダ産および米国産がいずれも47%と最も多く**、次いでメキシコ産が3%、スペイン産が2%、デンマーク産が1%であった。
○前年同期（2021年度上半期）の取扱割合と比べると、カナダ産が6ポイント減少した一方、米国産が4ポイント増加した。

輸入豚肉の取扱割合（量販店）



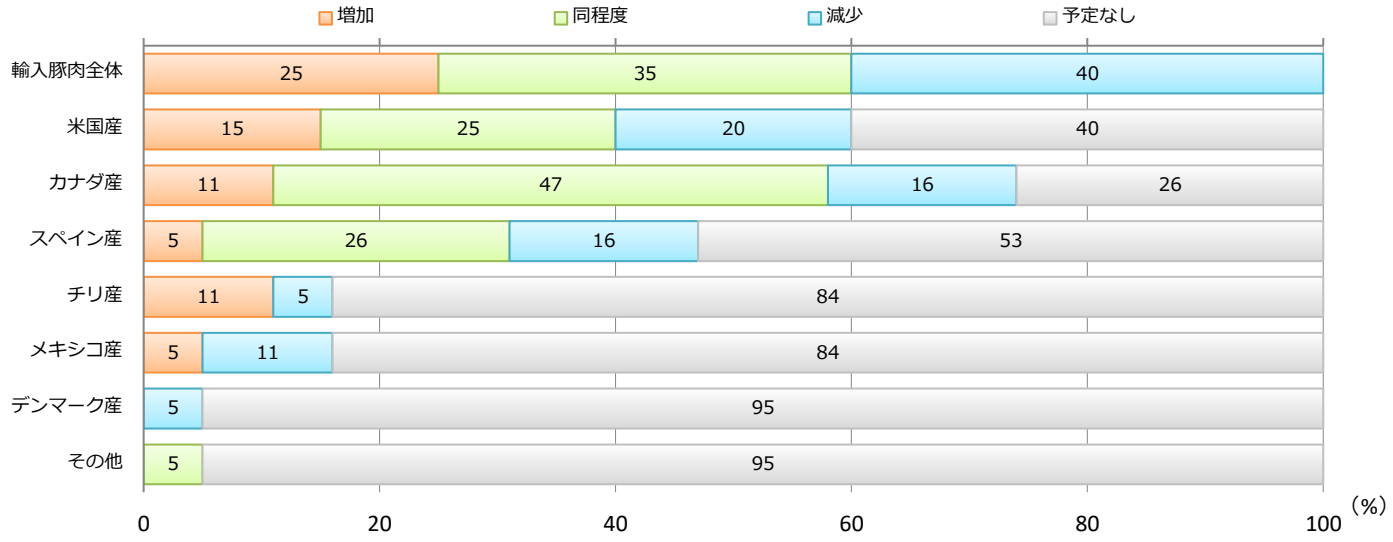
注：データは、各者の取扱割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

輸入豚肉の取扱見通し（量販店）

～ 輸入豚肉は同程度から減少の見通し ～

○今後1年間の量販店における輸入豚肉の取扱見通し（重量ベース）については、**輸入豚肉全体では「減少」が40%と最も多く、次いで「同程度」が35%、「増加」が25%であった。**
○国別に「予定なし」を除いて見ると、米国産、カナダ産、スペイン産で「同程度」が最も多いものの、「減少」が「増加」を上回っている。
○減少の理由としては、「現地価格の高騰」、「円安」、「国産豚肉との価格差が小さくなり、価格優位性が低下したため」などが挙げられた。

今後1年間の輸入豚肉の取扱見通し（量販店）

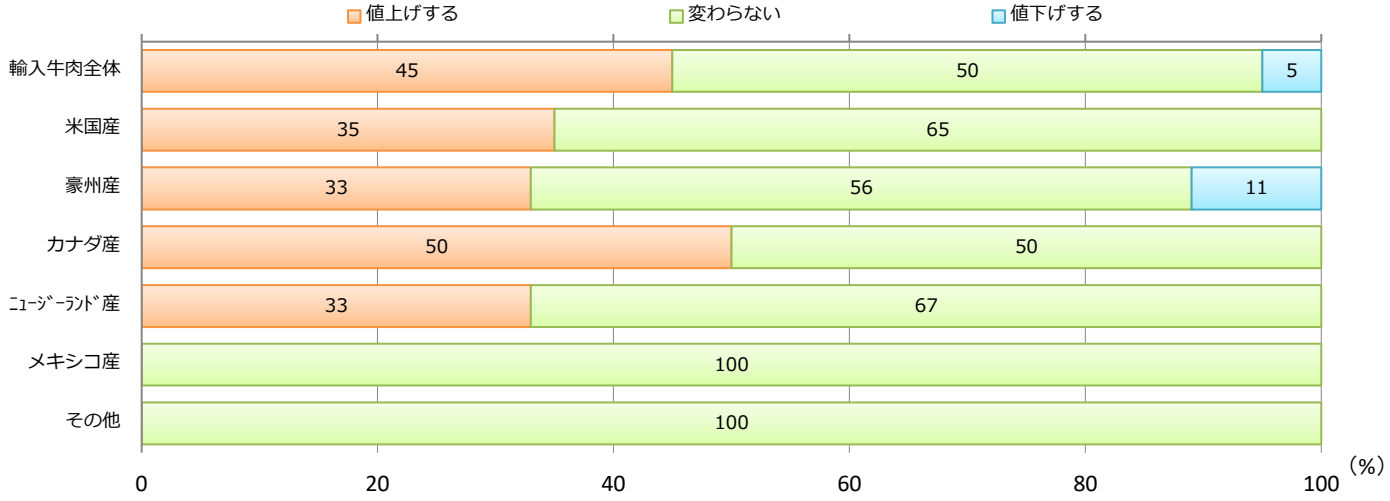


注：重量ベース

輸入牛肉の販売価格見通し（量販店）　～「値上げ」が「値下げ」を大きく上回る～

○今後1年間の量販店における輸入牛肉の販売価格の見通しについては、**輸入牛肉全体では「変わらない」が50%と最も多い中、「値上げする」が45%となった。「値下げする」は5%となり、「値上げする」が「値下げする」を大きく上回った。**
○国別に見ると、カナダ産は「値上げする」および「変わらない」が同率であったものの、それ以外の区分では「変わらない」 が最も多かった。
○販売価格の値上げの理由については、 「現地価格の高騰」、「円安」などが挙げられた。

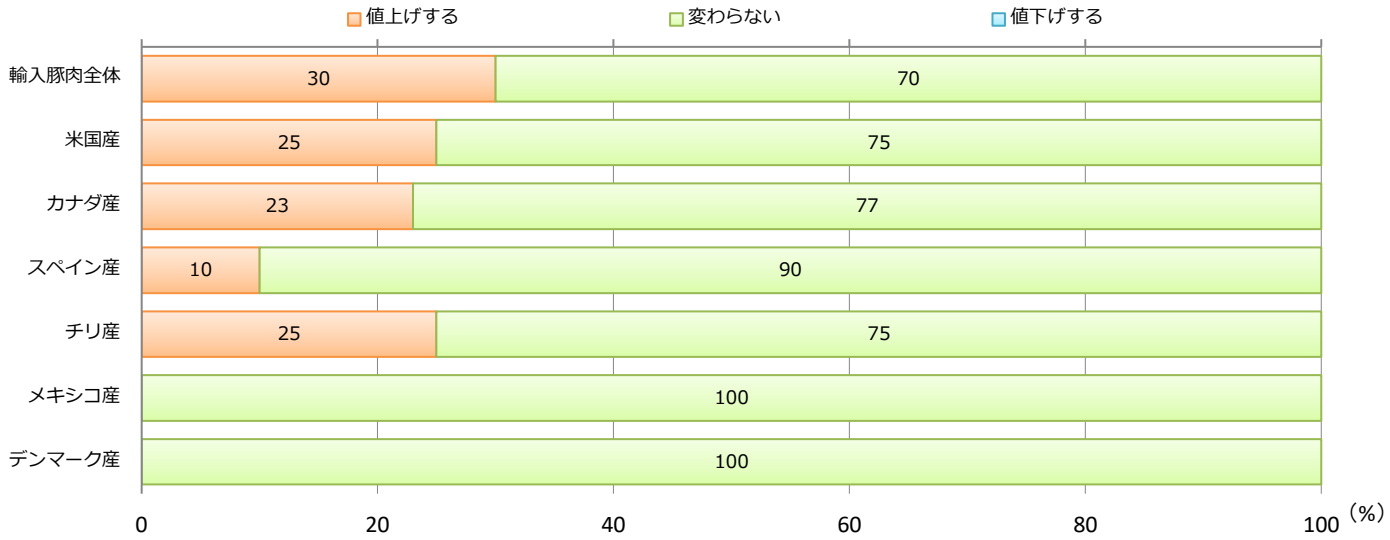
今後1年間の輸入牛肉の販売価格見通し（量販店）



輸入豚肉の販売価格見通し（量販店）　～「変わらない」が最多～

○今後1年間の量販店における輸入豚肉の販売価格の見通しについては、**輸入豚肉全体では「変わらない」が70%と最も多くなった**。次いで「値上げする」が30%であった。
○国別に見ても、全ての区分において「変わらない」が最も多い結果となった。
○販売価格の値上げの理由については、 「現地価格の高騰」、「円安」などが挙げられた。

今後1年間の輸入豚肉の販売価格見通し（量販店）



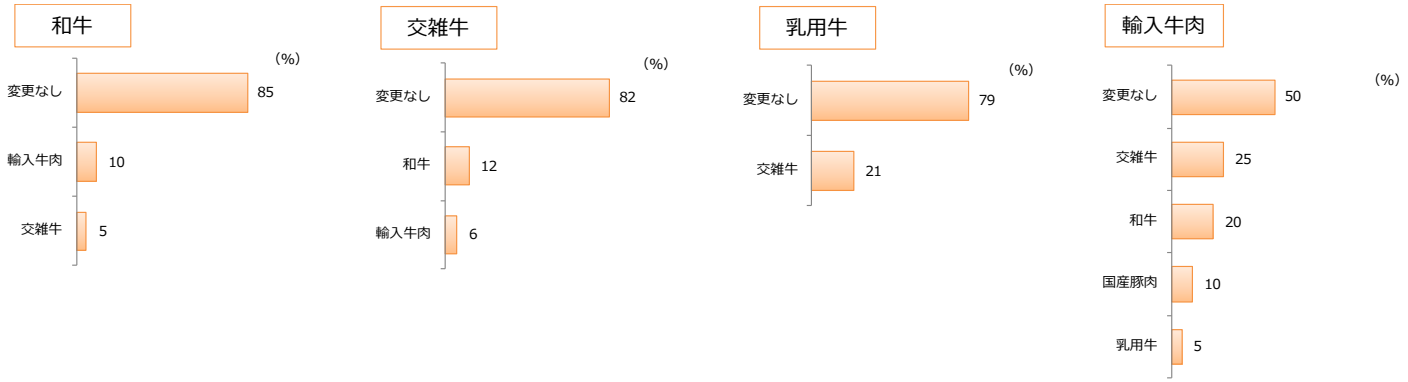
牛肉の切替実績（量販店）

～ 輸入牛肉の5割で交雑牛や和牛などの国産品への切替え ～

○2022年度上半期の量販店における牛肉の取り扱いの他品種などへの切替実績（重量ベース）については、国産品はいずれも「変更なし」が約８割を占める一方、**輸入牛肉については、「変更なし」が50%にとどまり、切替えに当たっては、25%が交雑牛、20%が和牛、5%が乳用牛と計50%の国産品への変更**に加え、他畜種である国産豚肉への変更が10%あった。

○他品種などへの切替えの理由については、和牛は「売れ行き低迷」、交雑牛は「単価上昇を期待して和牛へ変更」、「売れ行き低迷」、乳用牛は「ホルスタインの生産頭数減少」、「売れ行き低迷」、輸入牛肉は 「輸入牛肉の値上がり」、「売れ行き低迷」などが挙げられた。

牛肉の他品種などへの切替実績（量販店）



注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。

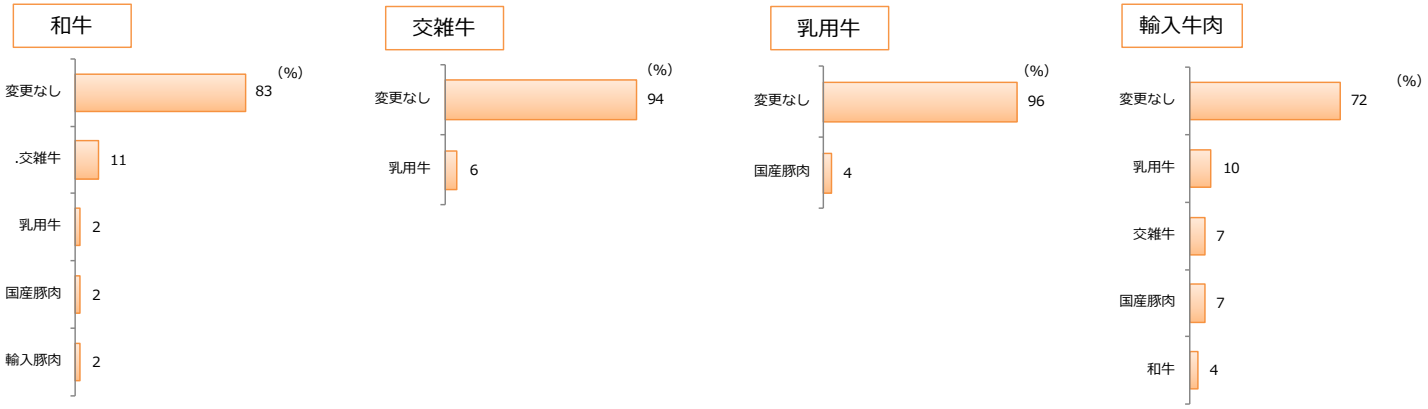
牛肉の切替実績（食肉専門店）

～ おおむね変更なし ～

○2022年度上半期の食肉専門店における牛肉の取り扱いの他品種などへの切替実績（重量ベース）については、全ての区分で「変更なし」が最も多い中、輸入牛肉は、量販店と同様に、国産品である乳用牛、交雑牛、和牛への変更に加え、他畜種である国産豚肉への変更もあった。

○他品種などへの切替えの理由について、輸入牛肉では「輸入牛肉の値上がり」が最も多く挙げられた。

牛肉の他品種などへの切替実績（食肉専門店）



注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。

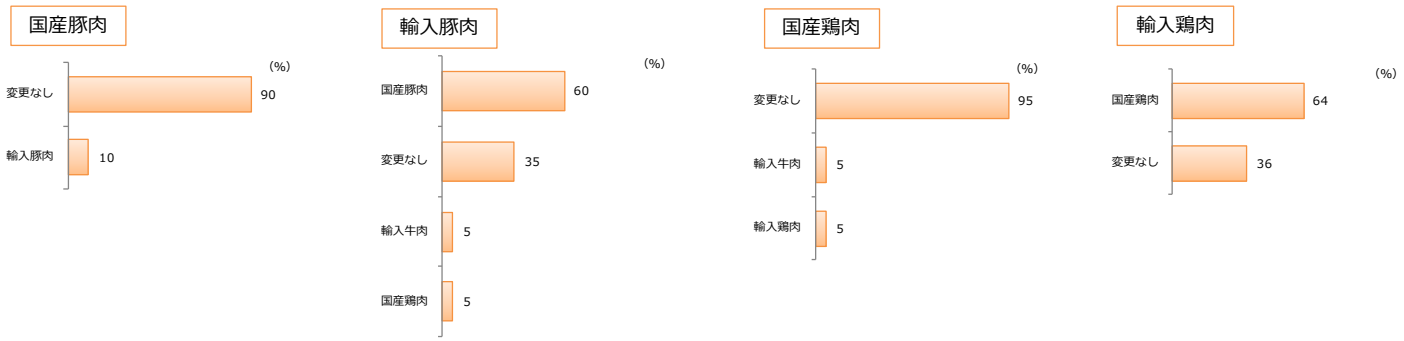
豚肉・鶏肉の切替実績（量販店）

～ 豚肉、鶏肉ともに輸入品から国産品への切替えが6割以上 ～

○2022年度上半期の量販店における豚肉および鶏肉の取り扱いの他品種などへの切替実績（重量ベース）については、国産品はいずれも「変更なし」が９割以上を占める中、**輸入品については、「変更なし」が3割強にとどまり、輸入豚肉の60%、輸入鶏肉の64%で国産品への変更があった**。

○他品種などへの切替えの理由については、輸入豚肉の国産豚肉への変更については「輸入豚肉の値上げ」が最も多かったほか、「消費者の国産志向」、「仕入価格が国産豚肉と同程度なため」などが挙げられた。輸入鶏肉の国産鶏肉への変更については「輸入鶏肉の値上げ」が最も多かったほか、「売れ行き低迷」、「消費者の国産志向」「供給の減少」などが挙げられた。

豚肉・鶏肉の他品種などへの切替実績（量販店）



注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。

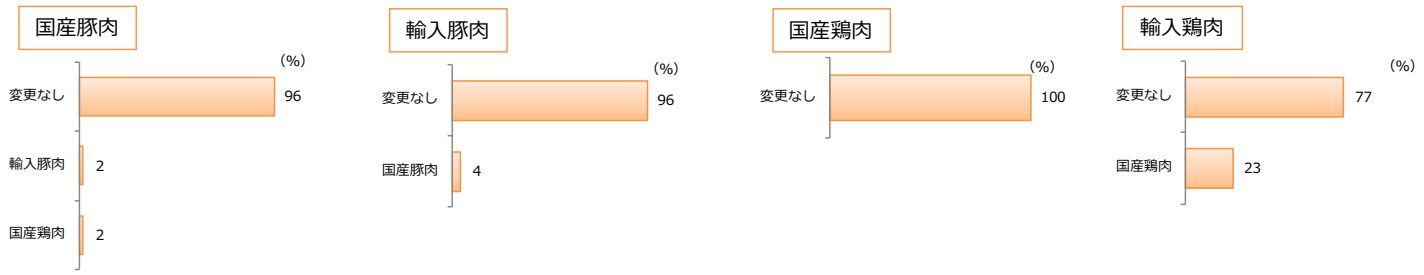
豚肉・鶏肉の切替実績（食肉専門店）

～ おおむね変更なし ～

○2022年度上半期の量販店における豚肉および鶏肉の取り扱いの他品種などへの切替実績（重量ベース）については、全ての区分で「変更なし」が最も多い中、輸入鶏肉は国産鶏肉への変更が23%あった。

○他品種などへの切替えの理由について、輸入鶏肉では「輸入鶏肉の値上げ」が最も多く挙げられた。

豚肉・鶏肉の他品種などへの切替実績（食肉専門店）



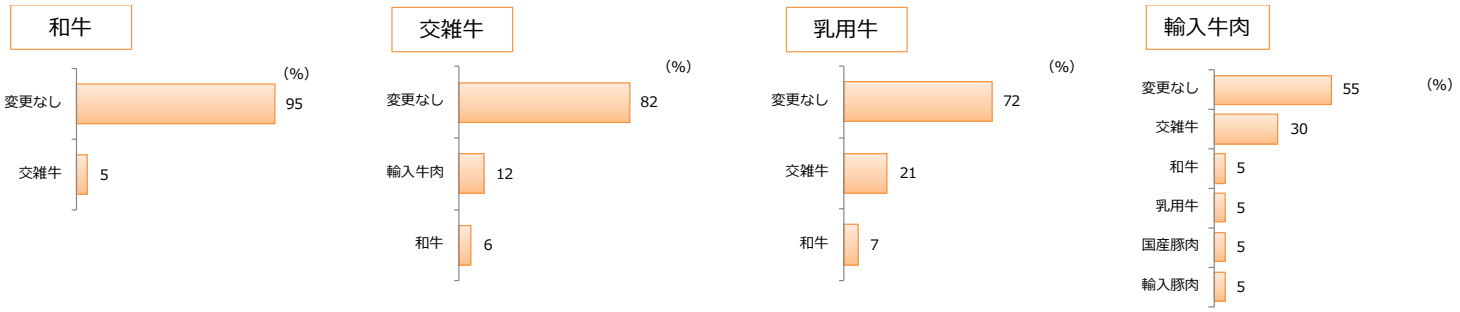
注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。

牛肉の切替見通し（量販店）

～ 輸入牛肉の4割が交雑牛や和牛などの国産品への切替見通し ～

○2022年度下半期の量販店における牛肉の取り扱いの他品種などへの切替見通し（重量ベース）については、国産品はいずれも「変更なし」が7割以上を占める一方、**輸入牛肉については、「変更なし」が55%にとどまり、切替えに当たっては、30%が交雑牛、5%が和牛、5%が乳用牛と、計40%で国産品への変更が見通され**、他畜種である国産豚肉または輸入豚肉への変更もそれぞれ5%見通されている。
○他品種などへの切替えの見通し理由については、国産品はいずれも「売れ行き低迷」、輸入牛肉は「輸入牛肉の値上がり」が最も多かったほか、「売れ行き低迷」なども挙げられた。

牛肉の他品種などへの切替見通し（量販店）



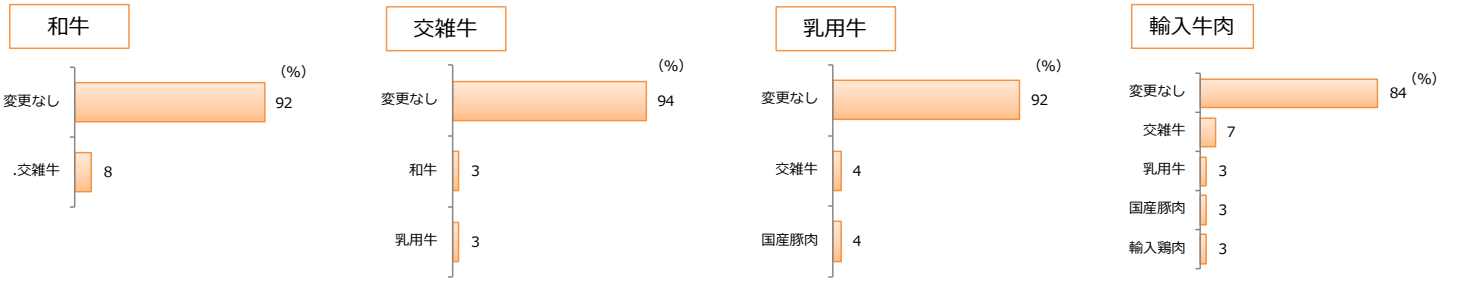
注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。

牛肉の切替見通し（食肉専門店）

～ おおむね変更なしの見通し ～

○ 2022年度下半期の食肉専門店における牛肉の取り扱いの他品種などへの切替見通し（重量ベース）については、全ての区分で「変更なし」が最も多かった。
○他品種などへの切替えの見通し理由について、輸入牛肉では 「輸入牛肉の値上がり」が最も多く挙げられた。

牛肉の他品種などへの切替見通し（食肉専門店）



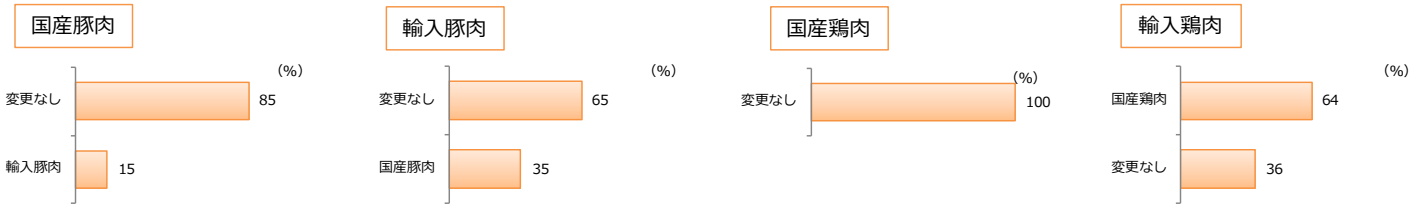
注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。

豚肉・鶏肉の切替見通し（量販店）

～ 輸入鶏肉は6割超で国産鶏肉への切替見通し ～

○ 2022年度下半期の量販店における豚肉および鶏肉の取り扱いの他品種などへの切替見通し（重量ベース）について、国産品のうち国産豚肉については、「変更なし」が8割以上を占める中、輸入豚肉への変更見通しが15%、また、国産鶏肉については全て「変更なし」であった。
一方、輸入品のうち**輸入豚肉については、「変更なし」が６割以上を占める中、国産豚肉への変更見通しが35%あった**一方で、**輸入鶏肉については、「変更なし」が36%にとどまり、国産鶏肉への変更見通しが64%と最も多い結果となった**。
○他品種などへの切替えの見通し理由については、輸入鶏肉の国産鶏肉への変更については「輸入鶏肉の値上げ」が最も多かったほか、「消費者の国産志向」、「卸売業者などによる国産鶏肉の売り込み」、「輸入鶏肉の供給減少」などが挙げられた。

豚肉・鶏肉の他品種などへの切替見通し（量販店）



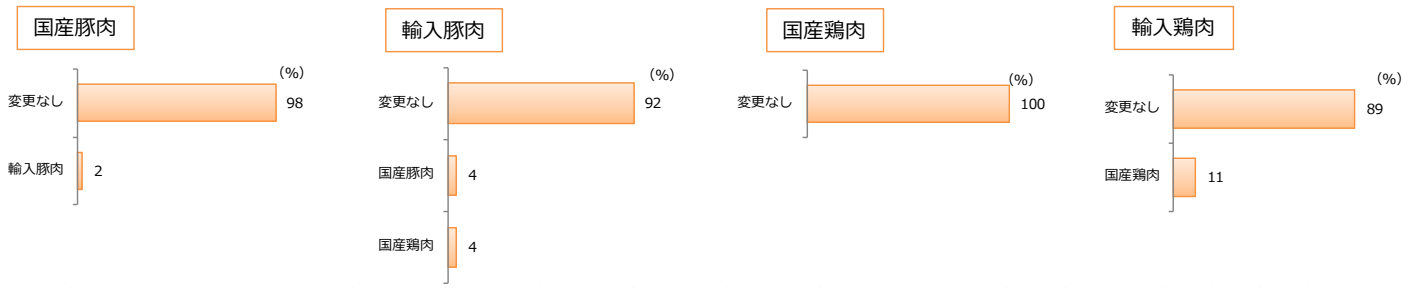
注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。

豚肉・鶏肉の切替見通し（食肉専門店）

～ おおむね変更なしの見通し ～

○2022年度下半期の食肉専門店における豚肉および鶏肉の取り扱いの他品種などへの切替見通し（重量ベース）については、全ての区分で「変更なし」が最も多い中、輸入鶏肉から国産鶏肉への切替見通しが11%あった。
○他品種などへの切替えの見通し理由について、輸入豚肉および輸入鶏肉ではいずれも「輸入品の値上げ」などが挙げられた。

豚肉・鶏肉の他品種などへの切替見通し（食肉専門店）



注：複数回答。重量ベース。全体のおおむね10%以上の取り扱いの切替えについて回答。回答のあった品種・畜種のみ表示。